

古代「東国」の史的位置

関口 功一

# 古代「東国」の史的位置

## 目次

問題点の所在	9
第一部 「毛野」の分割過程	
第一章 「上毛野」と「下毛野」	28
はじめに	28
1、機械的地域分割の類例	29
2、「毛野」の分割の実態	33
3、太田天神山古墳出現の意味	42
小結	47
第二章 「緑野（ミドノ）屯倉」の実体	51
はじめに	51
1、「武蔵国造の反乱」の周辺	52
2、ミヤケの廃止	61
3、「評首」刻字の意義	66
小結	72
第三章 「佐為（サイ）ミヤケ」の可能性	77

はじめに	77
1、「上毛野佐為評」成立の前提	78
2、佐位郡の実態	81
3、「オホタ」と「ミタ」	86
小結	88
第四章 前橋市中鶴谷遺跡出土の「田部」の墨書のある土器	91
はじめに	91
1、榛名山二ツ岳の噴火	91
2、勢多評の実態	94
3、大室古墳群から多田山古墳群へ	98
小結	102
第五章 「甘良（カムラ）ミヤケ」と貫前神社	105
はじめに	105
1、タゴ郡オホヤケ郷	106
2、「カムラのミヤケ」の推定地	109
3、「上野国府」設定と甘良郡	111
小結	113
第六章 「佐野（サヌキ）三家」の意義	116



はじめに.....	116
-----------	-----

1、八幡古墳群の消長.....	116
-----------------	-----

2、片岡郡の条里型土地区画.....	119
--------------------	-----

3、上毛野片岡評と大和葛城県との関係.....	122
-------------------------	-----

小結.....	126
---------	-----

第七章 上毛野地域の「郡」の成立.....	128
-----------------------	-----

はじめに.....	128
-----------	-----

1、大化「東国等国司」の派遣.....	131
---------------------	-----

2、地域差の発生.....	135
---------------	-----

3、「評」と「郡」.....	140
----------------	-----

小結.....	144
---------	-----

## 第二部 律令制的地域編成政策の諸段階

第一章 「廃置国郡」の意味.....	147
--------------------	-----

はじめに.....	147
-----------	-----

1、行政手続としての「廃置国郡」.....	148
-----------------------	-----

2、畿内地域の事例.....	169
----------------	-----

3、東国地域の事例①（東海道）.....	175
----------------------	-----

4、東国地域の事例②（東山道）	190
5、東国地域の事例③（北陸道）	195
6、西国地域の事例①（山陰道・山陽道）	198
7、西国地域の事例②（南海道）	202
8、西国地域の事例③（西海道）	204
小結	207
第二章 和銅四年の多胡郡設置問題	213
はじめに	213
1、「多胡碑」の問題点	214
2、多治比三宅麻呂と平群安麻呂	222
3、高崎市矢田遺跡の調査	225
小結	232
第三章 律令的地域編成における東山道北辺地域と東国	236
はじめに	236
1、出羽国の設置と陸奥国	237
2、移民供給源としての東国地域	244
3、石城国に石背国	251
小結	263

第四章 初期の「按察使」の役割	270
はじめに	270
1、創設の事情	271
2、機能とその変質	277
3、「相模・武蔵・上野・下野」	283
小結	286
第五章 東山道「駅路」の成立	290
はじめに	290
1、古代の「道」制度の問題	291
2、律令制的地域再編成と交通路の連結	294
3、東山道「駅路」の成立	300
小結	308
第六章 「国」の等級変更	313
はじめに	313
1、国の等級について	313
2、国の等級変更について	317
3、九世紀前半の上野国の等級変更	322
小結	325

第七章 地域編成に関わる史料二題	328
(1) 名古屋市立博物館蔵『倭名類聚抄』国郡部	328
はじめに	328
1、名博本国郡部の記載の特色	328
2、上野国の郡名・郷名	341
小結	352
(2) 群馬郡の「分割」をめぐる二つの史料	355
はじめに	355
1、大東急記念文庫本『倭名類聚抄』	355
2、群馬郡の分割をめぐる注記	357
3、所謂「上野国交替実録帳」諸郡官舎項に見える地域名称	362
4、中世的郡・郷の再編	367
小結	404
成果と課題	409

## 問題点の所在

「東国」という言葉の意味について、対象地域の広がりの問題はあるが「日本」という国号の成立と類似する要素がある。「日本」という言葉は、今でこそ国名であるが、古代中国にあつては日の出の起る東方という意味の一般名詞であつた。時間経過のなかでそれが、偶々東方に位置した「倭国」を指し示すことになった。同様に、中国にとつての「東国」は、朝鮮半島の国々であり「倭国＝日本」であつた。

本稿で取り上げようと試みる「東国」は、小中華思想に起因すると見られる「畿内」から見たそれである。その「東国」には、時期によつて①領域の変動、②名称の変化が伴つた。従つて、少なくとも各時代の「東国」を考察するに当たつては、各領域的広がり毎に考察しなければ的はずれになる部分が生ずるのは避けられない。しかも、ある段階からは「中央」から見れば「地方」であり、「国家」からみればその構成要素たる「地域」であつたのは紛れもない事実であると思われる（1）。

その大きな意味での「東国」のうち、中国で最も早い時期に認識された政治的実体が「邪馬台国」であり、その所在地等の問題に関しては、日本の古代国家成立に関わる根本問題として、永く検討が重ねられ、多くの見解が提示されてきている。そのような動向の下でも、特に最近内外の新たな考古学的調査成果の蓄積と、『魏志倭人伝』を中心とする基本史料の読み直し、東アジア地域史全体に関する歴史事実の解明などによつて、非常に大きく前進がみられつつあるように思われる。

かつて「謎の三世紀」などと言われた時代の実相が、近畿地方以西を中心に急激に明らかにされつつある。筆者の雑駁な理解によれば、九州方面にあった「奴国」等の多数のクニグニは、中国大陆の諸勢力（王朝）との関係のなかで興亡を繰り返し、西日本を中心に幾つかの核になるような地点を発生させていった。それらの結集の実力が侮れないものであったのは、西日本の日本海側・瀬戸内海沿岸・九州北部など各地の個性的な王墓に埋納された考古学的な遺物（鉄製品・石製品・ガラス製品等）の内容に如実に示されている。

それらの幾つかある「核」の地域なかで、頭ひとつ抜け出した形なのが「楯築墳丘墓」に代表される吉備地域や出雲地域であり、それらを含めて各地の勢力が結束する形で、奈良盆地（東部）を中心に「邪馬台国」が成立する。その表象に纏向型の墳丘墓があり、大きなピークとして「箸墓」が位置づけられるのである。九州地方北部に「邪馬台国」が所在したとする見方に立つても、最初期の前方後円墳のなかで最大なのが「箸墓」であるという事実は動かないであろう。

水稲耕作技術の波及は、そうした政治的な動向よりも早く、日本海側を北上する動きと太平洋沿岸を北上する動きとが、やや前者が先行する形で展開されたい。両者が最終的に落ち合うのが、国内最大の平野地形である関東地方であるのは、そのような大地形に、十分対応できるような池溝造営などの施設工事の技術が、同時代にはまだ追いつかなかったためなのだろう。特に北関東西部地域については、交通上の順路の問題も併せ、南関東や中部高地などに比較して、その時期がやや後発するのではないか。

それにしても北関東地方西部は、弥生時代→古墳時代早期にやや低調な印象がある。「邪馬台国」の時代にやや取り残されているのである。集落や土器編年上は、一応断絶はないのかもしれないし、「倭国大乱」に対応するような環濠集落・高地性集落らしき遺跡も絶無ではない。今後、重要な遺跡が発見・調査される可能性も否定できないが、



地形的な制約以外にも、農耕の開始の遅延に結びつくような要素があったのではないか。

様々な要素はあると思われるが、大きなものとして現状では浅間山の火山噴火を想定している。狩猟・最終経済の段階で、定住的な生活でないことは、災害時の危機的な状況に対処する形での移動を促進させ、人口密度の低下Ⅱ労働力の集約が不可能な事態を招来したのではないか。そしてそのことは、その後の一定時間の経過の下で、巨大な開発可能な土地Ⅱ「毛野」へと転化していった可能性がある。そして未開のそれは、中央の勢力にとって「ミノ（御野）→シナノ（科野）→ケノ（毛野）」と続く「野」の世界の最後に期待されるものであった。

東国地域での、発生期の墳丘墓（ないし古墳）に対する決定的な情報不足は否定できないが、古墳の年代比定に決定的なズレがあるか、大災害の介在を想定しなければ、北関東北西部の古墳発生時期の、一世紀近い遅れを理解できない。既存の保守的で強力な勢力が存在したという可能性もなくはないが、それならば西日本で発見されているような、各種の墳丘墓に相当する遺構・遺物がもっと検出されていてもよさそうなのである。

一転して、四世紀は大開発の時代となった。平野部の各地に、大規模な池溝掘削を伴うような耕地が展開し、高塚古墳も築造された。徐々にその規模が巨大化し、五世紀には大王墓級の前方後円墳まで出現することになるのである。そのような延長上に位置づけできる時期、東国地域全般に亘って高塚古墳が盛んに築造された、五く六世紀とは一体どのような時代だったのか。また、この時期に「毛野」が分割されたと理解する見方があるのは何故なのか。

少なくとも、東国地域で具体的にどのような動きがあったのかを示す確実な同時代史料はほとんど認められず、その意味で説得的な東国地域史像は描きにくい。その一方で、五世紀後半とされる埼玉稲荷山古墳鉄剣銘や三ツ寺Ⅰ遺跡の存在は、それ以前の東国地域にヤマト王権との密接な関係が成立し、大規模な開発行為を前提に、地域を掌握する勢力が幾つか存在したことを如実に示している。

記紀に描かれた歴史像では、活発な対外関係の推移がうかがわれるが、それらは同時代のヤマト王権の問題意識の所在を如実に示している。王権の望むと望まざるとにかかわらず、その後の対外関係の後退によって、いやでも国内政治に注意がいくようになっていった。

以下の行論のために、五〜七世紀の推移と東国地域の関連記事を、参考とすべき七世紀段階まで含めて整理してみたのが次表である。この整理に基づいて、現段階での二・三の私見を提示してみたい。

表 五〜七世紀の政治過程と東国

天皇	項目	東国・上毛地域
四一三	倭国、東晋に方物献上	
四二一	讃、宋に遣使	
四三八	珍、宋に遣使	
四四三	済、宋に遣使	
四五一	済、宋に遣使	
四六二	興、「安東將軍」となる	四七一 埼玉稻荷山古墳鉄剣銘
四七八	倭王武の上表文（↓宋順帝）	
	「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事 安東大將軍 倭王」	
	「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事 安東大將軍 倭王」	

（雄略）

<p>四七九 武、「鎮東將軍」となる</p>	<p>黒井峯遺跡 三ツ寺I遺跡（付近に広くフロ地名あり）</p>
<p>五〇二 武、「征東將軍」となる</p>	<p>（榛名山二ツ岳の噴火①） ↓ 榛名山東麓以東に火山災害の影響</p>
<p>五〇七 繼体天皇即位</p>	<p>上毛野地域西部の相対的優位性</p>
<p>五一二 百濟、伽耶西部支配</p>	<p>※ランドプランとしての「車」</p>
<p>五一三 百濟、伽耶東部支配</p>	<p>・武蔵国造の反乱：上毛野君小熊の関与</p>
<p>五二七 筑紫国造磐井の反乱</p>	<p>緑野屯倉の設置・「勾舍人部」</p>
<p>（安閑 宣化） 内乱状態力？ 全国的な屯倉設置</p>	<p>佐野三家（物部君・磯部君）</p>
<p>五四〇 伽耶問題で大伴金村失脚</p>	<p>↓大伴氏の相対的影響力低下（↑物部氏）</p>
<p>五五二 仏教公伝（553）</p>	<p>↓仏教の地域浸透①</p>
<p>崇仏論争 崇仏派  蘇我氏</p>	<p>↓大量の渡来人流入①</p>
<p>排仏派  物部氏</p>	<p>↓物部氏の相対的影響力低下（↑蘇我氏）</p>
<p>五六二 伽耶（任那）滅亡</p>	<p>（榛名山二ツ岳の噴火②） ↓ 上毛野地域西部の相対的優位性</p>
<p>↓朝鮮半島の拠点を失う</p>	
<p>敏達 五八七 物部氏滅亡</p>	

用明	崇峻	推	古	舒明	皇極	孝徳
五八九 隋、中国統一	五九四 三宝興隆の詔	六〇〇 遣隋使派遣（『隋書』）	六〇三 冠位十二階 六〇四 憲法十七条 六〇七 小野妹子、隋へ 六〇八 再度小野妹子、隋へ 六一四 犬上御田歙、隋へ 六一八 隋滅亡。唐中国統一	六三〇 第一回遣唐使 六四三 山背大兄王の変 六四五 乙巳の変↓蘇我氏滅亡 古人大兄王の変	東国等国司の派遣 難波へ遷都	六四六 改新の詔
※広域カムラ評の原型↑（対立？）↓クルママ評	↓仏教の地域浸透②	※物部氏が設置したミヤケを蘇我氏が蚕食する形で地域支配を推進 ※仏教振興政策が追い風Ⅱ山王麿寺（放光寺）		蝦夷の反乱、上毛野形名（將軍）征討	↓蘇我氏の相対的影響力低下（↑皇室？）	↓地域で対応したのは朝倉君・井上君

齊明	① 公地公民	六四九	蘇我倉山田石川麿自刃
	② 行政・軍事・交通制度	六五五	飛鳥へ遷都
	③ 班田制	六五八	有馬皇子の変
	④ 税制	六六〇	百濟滅亡
		六六三	白村江の戦い
(中大兄 称制)		六六四	冠位十二階
		六六七	近江大津宮に遷都
		六七〇	庚午年籍

↓天皇等の子代・屯倉廃止、 豪族の部曲・田荘廃止：食封・布帛支給	↓京師、畿内制、国・郡・里制 軍団、閭閻・斥候・防人 駅馬・伝馬・鈴契	↓戸籍・計帳、五十戸一里、町段歩制 ↓調、調副物、庸、兵士、仕丁、采女	↓大量の渡来人流入② ↓東国中心の軍編成、上毛野稚子参戦	六六五	百濟人四〇〇人余を近江国神埼郡へ移植
				六六六	百濟男女二〇〇〇人を東国へ移植
				六六九	百濟人七〇〇人余を近江国蒲生野へ移植

天智	天武	持統
<p>六六八 高句麗滅亡</p> <p>六七一 近江令？</p> <p>六七二 壬申の乱</p> <p>飛鳥浄御原宮に遷都</p>	<p>六七五 諸氏の部曲の廃止</p> <p>六七六 新羅、朝鮮半島統一</p> <p>六八一 飛鳥浄御原令・国史編纂</p> <p>六八三 富本銭使用</p> <p>六八四 八色の姓</p> <p>六八六 大津皇子の変</p>	<p>六八九 飛鳥浄御原令施行</p> <p>六九〇 甲寅年籍</p> <p>六九四 藤原京遷都</p>
<p>↓大量の渡来人流入③</p> <p>↓畿内近国中心の軍編成、上毛野氏参戦なしカ？</p> <p>六七五 唐人三〇人を遠江国へ移植</p> <p>六八一 山上碑</p> <p>六八七 高麗人五六人を常陸国へ移植</p> <p>新羅人一四人を下毛野国へ移植</p> <p>百済僧尼百姓二二人を武蔵国へ移植</p> <p>六八八 百済人を甲斐国へ移植</p> <p>六八九 新羅人を下毛野国へ移植</p> <p>六九〇 新羅人一二人を武蔵国へ移植</p> <p>新羅人を下毛野国へ移植</p>		



先ず、地方の動向に影響を与えるような、中央の諸政策に注目してみる。

① 中央と地方（中央の豪族と地方豪族とのつながり）

熊本県江田船山古墳鉄剣銘や、埼玉県稲荷山古墳鉄剣銘等によって知られるように、五世紀代には直接・間接に大王周辺と結びつく地方豪族が、全国的に多数展開していた。その契機には、定型化した「上番」などで宮殿に出仕し、個人的な人間関係が発生する場合や、婚姻関係などが想定される。そうしたゆるやかな結びつきは、宮殿・土地を伝領する王族によって再生産され、累代の関係として継承されていた。

さらに、中央豪族の盛衰に対応した、地域勢力の推移もあったと見られる。五世紀以降の中央豪族に関して言えば、当初は大伴・物部両氏の並立体制であったものが、大伴氏の外交政策の失態によって、物部氏の相対的優位性が確立することになる。東国地域全体のその後の展開を見ても、後発するとみられる物部氏関係の氏族の存在が、全体として目立つようである。

その物部氏は、石上神宮を奉祭し、基本的には排仏派であった。その結果、崇仏派の蘇我氏・王族と鋭く対立するようになる。両者の間の崇仏論争の結果、物部氏は蘇我氏・王族の共同執政に主導権を明け渡すことになった。このことは、物部氏とつながりを持つ各地域の宗教環境にも、何らかの形で投影するものがあつたであろう。

物部氏の勢力範囲を蚕食する形で、蘇我氏の影響力が急速に広まったとされるが、それも程なく乙巳の変の発生によって解消されることになる。各地域では、中央で主導権を確保できた期間の短さから、物部から蘇我部への振り替え作業が、途中で中絶したような事例も少なくなかったであろう。そして、それら一連の支配関係を地域で体現したのが、ミヤケ・タドコロなどの地域支配のための機関であつた。

一旦解消された土地を媒介とする各種の関係は、最終的に「公地公民」制に基づいて土地と人民が収公され、王（皇）

族・貴族やそれらに連なる寺社の封戸などとして、再編・分配されることになる。実態としては、かなりの部分で旧制度の読替えにより対応していただろう。封戸主指定の連続性などに示されるように、既得権の大幅な侵害にはならないように、慎重に配慮されていたとみられる。制度の変更によって、変化したものと変化しなかったものの、十分な峻別を行う必要があるだろう。

## ② 外交（朝鮮半島の動乱）

対外関係に関しても双方向性がある。特に、七世紀の隋滅亡を境とする、半島情勢への関与の内容の変化に対応した、渡来人の内容の変化がある。

・「加羅↓百済↓高句麗↓新羅…」

五〜六世紀に関しては、倭国が徐々に半島から足場を失う過程が投影している。当初は、半島に居住した中国系渡来人が移住してきているが、それらの人々が大量に全国各地に分散居住していたとは考えにくい。基本的には、各国の滅亡に伴う難民の流入のインパクトが大きかったであろう。淀川筋を経由して、河内国・大和国に次いで山背国などに集団で居住するようになっていった。これらの人々の倭人化は早かった。

百済の滅亡後、渡来人たちの国内移住ルートが定型化し

・「↓大和国武市郡↓近江国↓東国地域①↓東国地域②…」

のように整理される。各地に流れ着いた人々は、紀ノ川筋を経由して大和国武市郡に集められた。「東国地域①」の段階までは、王権の所在地たる「都城」内への居住が前提となり、その移動に伴って集団で移住を繰り返すことになる。これに対し「東国地域②」は、東日本全域に及ぶが、特に関東地方への記事の集中が注意される。「評」の成立を伴うような渡来人の各地への配置に対応する記事になるだろう。

五、六世紀には、こうした政策的移住とは別に、各地に海外遠征した豪族単位で連れ帰った少数の渡来人が居住していたとみられる例がある。特に畿外では、局地的に少数出土する遺物によって想定されるが、その後何代にも亘って残存することではなく、程なく地域のなかに解消されてしまう。

七世紀段階の倭国の既得権の喪失によって、日本と朝鮮半島との関わり方に大きな変化を来した。特に半島での戦闘で、指導者層を失った場合には、その後の地域の氏族分布を一変させてしまうような影響があったはずである。上毛野地域などの場合にも、同様の事情が想定できるのではないか。

### ③ 宗教（仏教・道教の採用）

六世紀代に想定される仏教の導入は、既存の信仰との軋轢を伴う部分があったと想像される。仏教以前と以後の變化は当然あったろう。日本への流入と、各地域への導入に時間差があった可能性にも留意しておくべきである。

古墳時代に各地で見られる、泉水や玉類を使用する形式の巨石祭祀などは、大和盆地東、東南部にかけての祭祀形態の伝播をうかがわせる。それに関わった氏族の、地方への展開を示唆するものであろう。器財型の埴輪などはその延長上にあるのではないか。

これらの埴輪に、人物を含む葬祭風景を写させた今城塚古墳の外部施設は、その意味ではかなり独創的であった。人物に重点が移ったことの向こう側には、仏教がやむなく許していた偶像崇拜の存在が透けて見える。そのさらなる拡大解釈が、上毛野地域で隆盛した形象埴輪に行き着くことになるのではないか。その背景には、継体大王に至る王位継承とその後の混乱が、中央の指導力の一時的な減退をもたらした可能性がある。中央の厳しい政策的締め付けがあったなら、こうした個性溢れる造形は誕生しなかったのではないか。

これに対し、仏教が本格的に信奉されるようになり、内容に対する理解が徐々に深まってくると、偶像崇拜を疑わ

せるような造形物や、巨大な高塚古墳が顧みられなくなる。そしてそのエネルギーは、寺院建立などに振り向けられていくのである。

また、その後仏教が国家の統制下に位置づけられ、在来の宗教と融合した民間信仰的な仏教と乖離してゆく過程も注意される。高塚古墳の造営禁止につながるような薄葬思想もほぼ同根であったと考えられる。

史料に記述が「ない」が、考古学的調査の蓄積などによって具体的には「あった」と想定されるようになったことがある。その内容によっては、中央の政治過程に少なからぬ影響を与えることもあり得たであろう。

#### ④ 各種災害

治水や治山の発想がない段階では、各種の自然災害を防ぐ手だてがなく、神の仕業と諦めるほかなかった。上毛野地域では、しばしば浅間山をはじめとする火山災害に見舞われている。六世紀代に二度に亘って榛名山二ツ岳が噴火し、東麓（後の群馬郡）地域を中心に、相当深刻な被害をもたらしたことが知られている。

六世紀前後↓一次災害として、噴火に伴うガス・火山灰・軽石等の噴出があった。左記の噴出物が、成層圏に浮遊した結果引き起こされた異常気象によって、二次災害が発生した。その内容は、低温・多雨、その結果としての洪水（土石流）である。異常低温の継続による不作も想定されるさろう。それらの延長上で、周辺地域はかなりの期間にわたって無人化したと見られる。本格的に再開発が着手されるのは、地域内の秩序の再構築後になるだろう。

六世紀中頃↓一回目の噴火後、火山噴出物を被覆する形でようやく薄い表土が生成された頃、2回目の噴火が発生し、前回とほぼ同様の範囲に同様の被害をもたらした。被害からの部分的復旧後、まだ間もない時期であったので、地域住民の物理的・精神的なダメージはより大きなものであったと想像される。

この結果として、耕作放棄に至った耕地が広範囲に発生したと思われる。榛名山に対する「イカツホ」の認識が生

まれたのがこの時期であるとすれば、それほど大きな恐怖感を山麓全般の住民に抱かせたことになっていて興味深い。

泥流が直撃した場所などでは、水田が畑に転換するような場合もあったという。このことは、比較的広域での人の「移動」を発生させたであろう。その「移動」は、人口の偏在をきたし、その後の集落や耕地の内容、群集墳の立地等に影響を与えたとみられる。上毛野地域の場合、そのような場所に改めて「国府」が成立してくるのは、全くの偶然ではないだろうし、今日一般に想定されている以上に、きわめて複雑な政治過程が展開していたと思われる。

#### ⑤ 既存勢力の残存による地方の多極化

火山災害に代表されるような自然災害は、既存の地域組成を破壊するか、少なくとも変動させるような影響力があったと思われる。中央の豪族の消長とも関係してくるが、農業経営の破綻は、地域王権の信用失墜に直結したと推測されるからである。

大伴氏に対応する部民の分布は、本来広範囲に亘っていたと見られるが、地名を特定できるのは甘楽郡と邑楽郡のみである。広範囲に分布していても、密度はやや薄かったと想像される。

物部氏に対応する部民の分布は、鐮川流域から群馬郡南西部地域にかけて見られる。峠を越えた信濃国佐久郡や、下野国などの東山道筋全般に亘って、地点により濃密に居住していた。上毛野地域の伴造的氏族としての物部君氏は、甘楽郡や群馬郡南部に勢力を張っていた。特に磯部君氏とは親近関係にあったようである。大伴氏や物部氏に対応するような氏族の影響力は、この段階までの古墳の副葬品を含む祭祀の内容も規定するものであったろう。

蘇我氏に対応する部民の分布は、現状ではほぼ鐮川流域に限られる。物部氏の勢力を蚕食するためには、鐮川中流域での位置が問題になるだろう。少なくとも8世紀前半段階頃までは、優勢な勢力を保持していたと見られる。

今日知られる部姓については、額田部・山部・真髪部・春日部・六人部・矢田部・五百木部・日奉部等が知られて

いる。以上の氏族に関しては、8世紀以降の史料上見る限り、郡領などの地位に恵まれる機会は少なく、潜在的な地域勢力となっていたと考えられる。但し、消滅したわけではないことは、出土文字史料や金石文などからうかがわれる。近隣の武蔵七党の前身氏族が、古代的な姓を負う人々であったことを参考にすれば、類似した経過を辿ったとみてよいのではないか。

石上部君（↓上毛野坂本君↓上毛野坂本朝臣）は、碓氷郡と吾妻郡の郡領であった。群馬郡西部にも影響力があったと見られる。東山道「駅路」の設定に関与して、中央でも地位を獲得した可能性がある。

檜前部君（↓上毛野佐位朝臣）は、佐位郡で郡領を務めていた。那波郡にも居住していたと思われる。采女を出したり、「国造」に任命されたりして、一定期間優勢を維持していた。石上部君氏と連携して、東山道「駅路」の設定に関与し、中央でも地位を獲得した可能性がある。「西の石上部君・東の檜前部君」として、八世紀代の上野国を二分するような勢力であった。

壬生部君（↓壬生朝臣）は、群馬郡西部に勢力基盤があったと見られるが、鐙川流域でも甘楽郡で郡領を務めていた。征夷戦争への参加によって朝臣姓を獲得するのは、上毛野氏の存在を意識していたのかもしれない。

三家氏は、金井沢碑に見られ、群馬郡南部に分布していたと見られる。「佐野三家」の関係者である。金井沢碑には、物部君氏・磯部君氏の氏名も見られ、居住地域の近接と共に親近関係にあったものとみられる。現状では、ミヤケの実体に関する具体的な遺構は知られていないが、その設立・運営に密接に関わった氏族になるだろう。その廃絶後に不遇をかこつたことは想像に難くない。

朝倉君氏は、那波郡朝倉郷に由来するとみられる。遺称地の周辺には、上毛野地域でも最も多くの前方後円墳を含む広瀬・朝倉古墳群が展開しており注意される。大化東国等国司に、具体的に地域で対応したことが明示されている



のもこの氏族である。采女も出しているので、伝統的な郡領級の氏族になるだろう。

これらの間隙を埋める形で、渡来人や俘囚などの他地域からの流入があったと見られるが、いずれも7世紀後半以降の政策的なものであった。但し、管理組織の弛緩に伴って地域の治安にとってのマイナス要素になっていった。

#### ⑥ 既存の有力地方豪族の影響力低下

「上毛野」には「上毛野」氏がいたというのは自明のことのようなのだが、その実単純ではない。『日本書紀』によれば、上毛野氏の「祖」は中央から下向した皇子であり、その子孫が地域に留まって勢力を扶植したと伝える。地域統治のための政治勢力の核として、中央の貴種が尊重されることはありそうだが、何らかの事実をなぞったものであるのだとすれば、その時期は何時とするべきなのか。少なくとも先述の火山災害の前か、後かで意味合いが変わってくるだろう。地点にもよるが、現状ではそれ以前に「毛野」分割の基準となるような「県」が楔のように打ち込まれていた可能性がある。それは現在の渡良瀬川流域であった。

仮に、既存の地域勢力が成長して上毛野氏になったのであるとすれば、他の一般的な古代氏族の場合と同様に、その貴族化によって地方での足場も脆弱なものとなった可能性がある。畿内から僻遠であれば、なおさら不利な条件を背負ったことになる。

上毛野朝臣氏は、上毛野地域では勢多郡で郡領を務めていたことが確認できる。その他の例では、群馬郡井出郷での居住が知られている。恐らく三ツ寺Ⅰ遺跡（「城」と表記される）の場所も含まれる行政区分である。この遺跡と上毛野朝臣氏とは、直接関係があるのかないのか。この場所に、三ツ寺Ⅰ遺跡の造営段階から住んでいたのか、廃絶後に住むようになったのか。その付近に広がる「御風呂」「石上」などの地名との前後関係はどうなっているのか。当面確証は何もないし、ここでは十分に詳述できないが、幾つかの可能性に基づいた歴史過程は導くことができるだ

ろう。

上毛野朝臣氏とは別に、上毛野君氏が存在する。田辺史氏が、朝臣姓を獲得する以前に過渡的にそうであった場合でなく、朝臣姓を獲得しなかった氏族である。ここには中央と地方、上位と下位の二重構造が示されている可能性がある。古代氏族としての下毛野氏は、比較的明瞭な二重構造を示すが、上毛野氏についてもほぼ同様に理解できるのではないだろうか。

いずれにしても、時代の進展とともに多様な氏族の活発な活動が、古い時期にはあったかもしれない、上毛野氏の既得権に属するものを浸食していったと思われる。上毛野氏の活動の時期は長期間に及ぶが、地域で影響力を行使できた時期は案外短いのではないか。

ヤマト王権にとっての六世紀は、既存の王統の断絶を承けた継体天皇の即位によって幕を開ける。地方に対する中央の圧力は、一時的にせよ相当低下したと想像される。各地域の生産力に応じて、指導者の葬送に当たり高塚古墳が築造され、それを荘厳する装置が様々に工夫された。

また、対外関係の動員は、西日本から徐々に割り振られ、東日本にも及んできた。上毛野地域の豪族たちも、ある時期非常に積極的に参加したと思われる。その実績を踏まえて、中央での発言力を強める場合もあったろう。

対外関係の後退によって、いやでも内政に軸足を置かざるを得なくなったとき、国内に向けて各種の統制が試みられるようになっていった。それは、高塚古墳の造営にも及ぶようになったろう。個人のための古墳は、家族のための墓所に変わり、徐々に装飾性も失われていった。特に外部施設を構成していた形象埴輪は急速に失われ、最終的には高塚古墳を造営しない事態にまで立ち至る。その前提には、仏教の浸透に伴う葬送観の転換があったろう。寺院造営と古墳築造とは、経済的に見ても本来相容れないものであった。

問題なのは、各地で幾つもあった宗教の選択肢のひとつとして、比較的容易に仏教が選択・信仰されたことである。その前提には、巨大な自然災害発生に起因する地域神・既存の地域勢力の、權威の失墜が想定されたのではない。それが一般に喧伝されているような「渡来人」であつたかどうかは判然としないが、地域の主導権をとつたのがヤマト寄りの新来の勢力であつたという可能性が高い。それ以前のそれらの人々は、独自の神々を伴って移住してきていたと考えられる。

以下、古代「東国」地域史に関して、そのうちで大きな核を占めると考えられる「毛野」地域に軸足を置き、右の①⑤⑥の各要素に留意しながら、その史的位置について考えてみたい(2)。

#### 注

(1) 「東国」の概念については、荒井秀規『「東国」と「アヅマ」』(関和彦編『古代東国の民衆と社会』名著出版、一九九四年所収)の理解による。また指向性は全く異なるが、川尻秋生『古代東国史の基礎的研究』(塙書房、二〇〇三年)の志に倣いたい。

(2) この件に関する現在までの作業段階は次の通り。

- ① 拙著『東国の古代氏族』(岩田書院、二〇〇七年)。
- ② 拙著『上毛野の古代農業景観』(岩田書院、二〇一二年)。
- ③ 拙著『古代上毛野の地勢と信仰』(岩田書院、二〇一三年)。

○五世紀～七世紀「東国」史に関する最近の主要参考文献

- ・ 田村圓澄・小田富士雄・山尾幸久編『古代最大の内戦 磐井の乱』(大和書房、一九八五年)
- ・ 和田萃『古墳の時代』(体系日本の歴史2・小学館、一九八八年)
- ・ 佐伯有清編『古代を考える 雄略天皇とその時代』(吉川弘文館、一九八八年)
- ・ 小田富士雄『古代を考える 磐井の乱』(吉川弘文館、一九九一年)
- ・ 森田悌『古代東国と大和王権』(新人物往来社、一九九二年)
- ・ 原島礼二『古代東国の風景』(吉川弘文館、一九九三年)
- ・ 黛弘道『物部・蘇我氏と古代王権』(吉川弘文館、一九九五年)
- ・ 平林章仁『蘇我氏の実像と葛城氏』(白水社、一九九六年)
- ・ 高槻市教育委員会編『継体天皇と今城塚古墳』(吉川弘文館、一九九七年)
- ・ 吉田晶『倭王権の時代』(新日本出版社、一九九八年)
- ・ 森浩一・上田正昭『継体大王と渡来人』(大巧社、一九九八年)
- ・ 吉村武彦編『古代を考える 継体・欽明朝と仏教伝来』(吉川弘文館、一九九九年)
- ・ 山尾幸久『筑紫君磐井の戦争』(新日本出版社、一九九九年)
- ・ 水谷千秋『継体天皇と古代の王権』(和泉書院、一九九九年)
- ・ 大山誠一『日本古代の外交と地方行政』(吉川弘文館、一九九九年)
- ・ 笠井倭人『古代の日朝関係と日本書紀』(吉川弘文館、二〇〇〇年)
- ・ 熊谷公男『大王から天皇へ』(日本の歴史3・講談社、二〇〇一年)
- ・ 水谷千秋『謎の大王 継体天皇』(文芸春秋、二〇〇一年)

- ・小川良祐・狩野久・吉村武彦編『ワカタケル大王とその時代』（山川出版社、二〇〇三年）
- ・大橋信弥『継体天皇即位の謎』（吉川弘文館、二〇〇七年）
- ・住野勉一『継体王朝成立論序説』（和泉書院、二〇〇七年）
- ・若狭徹『古墳時代水利社会研究』（学生社、二〇〇七年）
- ・右島和夫・若狭徹・内山敏行『古墳時代毛野の実像』（季刊考古学別冊一七、雄山閣、二〇一一年）
- ・平川南『東北「海道」の古代史』（岩波書店、二〇一二年）

## 第一部 「毛野」の分割過程

### 第一章 「上毛野」と「下毛野」

はじめに

現状では、「毛野（国）」の分割に関して直接触言する史料は一つしかない。『先代旧事本紀』国造本紀下毛野国造条に引く該当箇所は、次のようなものである（1）。

（前略）

・上毛野国造

瑞籙朝、皇子豊城入彦命孫彦狭嶋命初治平東方十二国為封

下毛野国造

難波高津朝御世、元毛野国分為上下、豊城命四世孫奈良別初定賜国造

（後略）

『先代旧事本紀』国造本紀の史料的な問題もあつて、記載内容を字面通り受け取らない部分はあるが、仮に平安時



代の所産であり、特定の価値観に基づいて記述されているにせよ、現在から見れば同時代に近いということで、尊重されている部分がある。それにしても上毛野国造条の「初治平東方十二国為封」という表現は、全体に共通する定型的な記述形式「定賜国造」と比較して、極めて特異である。記述されている内容を時系列に従って整理すれば次のようになる。

【瑞籬朝】

【難波高津朝】

豊城入彦命—彦狭嶋命—（御諸別命）—〇—奈良別：

「毛野国」分割

周知のように「毛野」という語句としては、下野・常陸国境を流下するとされる「毛野（鬼怒）河」の例がある。また、典型的には「近江毛野」「小野毛野」などに見るような、人名にも例があることなどからすれば、固有名詞のなかでも必ずしも特殊な用例とするには当たらないであろう。通説の通り、ヤマト勢力にとっての「食饌・野」という位置づけの国土観になるものと思われる。

「国」制適用以前の地域名称は、どちらかという通称に近いので、厳密には地域編成には当たらないかもしれないが、現状での認識について整理しておきたい。

1、機械的地域分割の類例

大宝律令制定時の地域編成に関して先ず注意されるのは、郡（評）を中心とする「上・下」型の分割である。類似

する「上―・下―」型の分割については、先行する事例として国レベルの例がある。

○東海道Ⅱ（安房国―）上総国―下総国

○東山道Ⅱ上野国―下野国（―那須国）

前者にあつてはフサ（総）、後者にあつてはケノ（毛野）という地域がそれぞれ分割されたとするのである。『古語拾遺』によれば、天富命の項目で「（前略）天富命、更求沃壤、分阿波齋部、率往東土、播殖麻穀。好麻所生、故、謂之総国。穀木所生。故、謂之結城郡（古語麻謂之総。今、為上総・下総二国、是也）」と「総」の原義に言及する。「毛」が「木」に通じることと同断であろう。

なお尾崎喜左雄は、史料上見える「日高見国」の表記に注目し、次のような地域とその分割を想定された（2）。現在の関東地方の八カ国は、次のように整理されるというのである。

・【ヒタ】ヒタ上（日高見国）―ヒタ下（常陸国）

・【ムサ】ムサ上（相模国）―ムサ下（武蔵国）

・【ケヌ】上ケヌ（上野国）―下ケヌ（下野国）

・【フサ】上フサ（上総国）―下フサ（下総国）

令制国の前提として「道」に基づく行政区分がある（3）ことから、常陸国などでは「常道」の地名も知られている。その分割型として「道口」「道後」などは、東国地域でも実施されていたと見られる。

また、地域再編成の形式として「上―・下―」型の分割の他に「遠―・近―」の表示があるが、後世の七道の区分をまたいでおり、途中の地域の連続関係もなく、地域表示の方法ではあるが分割の方法にはなっていない。

○東山道・東海道Ⅱ近江国―遠江国

一般に、広域行政圏としての五畿内七道制（八世紀代成立）で、畿内を中心に近い方が「上」、遠い方が「下」というように理解されている。東日本に偏っており、「毛野」「総」といった前代の地域のまとまりを分割した形であるが、均分が意識されたかどうかは問題がある。特に前者で、上総国から安房国がさらに分立させられるからである。但し、漠然とあの辺といった程度の地域認識でなくなるのは、やはり具体的国境の画定作業が実施された七世紀代に下ることになるだろう。

表 「上・下」分割の郡

本来の地域名	分割後の国・郡		郷名
	備前国	上道	
吉備道	備中国	下道	宇治・幡多・可知・上道・財田・居都・日下・那紀・寄田 穂北・八田・邇磨・曾能・秦原・水内・銅代・近似・成羽・弟驥・穴田・湯野・川邊・呉妹・田上
朝倉	筑前国	上座	馬田・青木・塾饗・三城・城邊・立石
		下座	把伎・壬生・広瀬・祚田
八女	筑後国	上妻	大田・三宅・葛野・桑原
		下妻	新居・鹿待・村部
三毛	豊前国	上毛	山田・炊江・多布・上身
		下毛	山国・大家・麻生・野仲・諫山・穴石・小楠
対馬	対馬嶋	上県	賀志・雑知・玉調・豆殿
		下県	伊奈・向日・久須・三根・佐護

一方、七世紀以前の広域地域編成としては、「前・（中・）後」型の分割との類似性が指摘されている。

○北陸道Ⅱ越前国（―加賀国―能登国）―越中国―越後国

○山陰道Ⅱ丹波（前）国―丹（波）後国（―但馬）

○山陽道Ⅱ（美作国―）備前国―備中国―備後国

○西海道Ⅱ筑前国―筑後国、肥前国―肥後国、豊前国―豊後国

表記上、山陰道地域の丹波国は「前」が、丹後国は「波」がそれぞれ脱落して、全体の中でもやや異例である。同じく七道制で、概ね「畿内」を中心に見て同時代の交通路の行程上近い方が「前」・遠い方が「後」となるらしい。明らかに国名が先行するであろうから、『延喜式』制の「駅路」のようなものは、右のような原則に基づいて、その後順次設定されたか、原型になるものが元々あったと考える。西日本に偏りがあるが、特に編成時期が下る北陸地域は複雑だし、山陽道の美作国の設置も八世紀代になる。タニハ（旦波）地域については、「後」はあっても「前」がないというのも気になるところである。

「前・中・後」の区分については、広域行政区分としての「道」制度の実施が前提になる。畿内地域から見て「クチーナカ―シリ」と区分するのは「上・下」型の分割と比較すれば理解しやすいが、「中」を伴うか否かは個々の地域の内実の違いに係している可能性がある。

また、実際「上・下」型の分割が行われている「ケノ」「フサ」について、郡司の任命が問題になるような「国造」「県主」の居住について、後者は各郡域と対応するレベルでそれらが知られるのに対し、前者についてはその内実が不明とせざるを得ない状態である。

また、同様に国造の領域に関わるのではないかと見られる大きな付帯要素が含まれている。令制国として分立できる規模を持つナスとアワである。

・【ケヌ】上ケヌ（上野国）―下ケヌ（下野国）―ナス（那須国）  
・【フサ】上フサ（上総国）―下フサ（下総国）―アワ（安房国）

但し、アワは令制国として存続するが、ナスは上野国に対する下野国の規模の不均衡を補う形で内包されたまま持続される。以上を要約すれば、共通するような要素はほとんどないということになるだろう。

「上・下」型の分割と「前・（中・）後」型の分割とは、それぞれがほぼ近接した時期に実施された可能性がある。後述するような「毛野」の政治的分割の時期が認められるとすれば、厳密な時点の特定は困難だが、前者が六世紀以前、後者が七世紀以降になるだろう。両者の間での編成原理上の差異はほとんどなく、現状では地域差（東国と西国）とそれに伴う時期差と考えるのが穏当であると思われる。東国地域にも「前・（中・）後」型の分割原理が持ち込まれた可能性もあり、その場合には「上・下」型の分割を消すのではなく周辺での追加ということになるので、いずれにしても前後関係はあったことになる。

## 2、「毛野」の分割の実態

地域の実体としての「毛野」は、現在の群馬県と栃木県とに対応すると考えられている。それぞれが概ね上（毛）野国・下（毛）野国の範囲を継続している。但し、山間部に関してはこの限りではない。それは『和名抄』郷名の分布範囲と、今日の居住範囲とのズレに関係している。

改めて上野国と下野国との『倭名類聚抄』郡名及び郷名から想定される「国造」の領域を念頭に整理し直してみる

と次表のようになる。「那須国造碑」の存在によって知られるように、下野国内でも北部に位置する那須地域は、面積的にも大きく特異な位置を占める。これを除外して考えると、少なくとも残りの領域は均分に分割が行われたのではないことが明らかである。特に、下野国内の東半部の郡は大きく、西半部の郡は小さい傾向がある。山がちな西半部というだけでは説明できない。こうした傾向は、仮に那須地域を加えて考えてみても基本的には変わらない。こうした不均衡は何故発生したのだろうか。

表 「国造」領域から見た「毛野」の分割

○上毛野

郡名	郷名
碓氷	6 鮑馬・石馬・坂本（駅家）・磯部・石井・野後（駅家）（・俘囚）
片岡	5 若田・多胡・高渠・佐没・長野
甘楽	13 貫前・酒甘・丹生・那波・湍下・湍上・宇伎・有旦・那射・額田・新居・小野・抜鉢
多胡	6 山字・織裳・辛科・大家・武美・八田（・俘囚）
緑野	10 林原・小野・升茂・高足・佐味・大前・山高・尾張・保美・土師（・俘囚）
那波	7 朝倉・鞆田・田後・佐味・委文・池田・菰束
群馬	12 長野・井出・小野・八木・上郊・畦切・嶋名・群馬（駅家）・桃井・有馬・利刈・白衣【国府】
吾妻	3 長田・伊参・大田
利根	4 渭田・男信・笠科・呉桃

勢多	佐位	新田	山田	邑楽
9	5	5	4	4
深田・田邑・芳賀・桂萱・真壁・深渠・深澤・時沢・藤沢	名橋・雀部・茂侶・佐井（駅家）・刈名	新田（駅家）・津野・石西・祝人・淡甘	山田・大野・園田・真張	池田・疋太・八田・長柄

○下毛野

郡名	郷名
足利	大窪・田部・堤田・土師（・余戸）（・駅家）
梁田	大宅・深川（・余戸）
安蘇	安蘇・説多・意部・麻績
都賀	布多・高家・山後・山人・田後・生馬・倭文・高栗・小山・三島（・駅家）【国府】
寒川	真木・池邊・努宜
河内	文部・刑部・大績・酒部・三川・財部・真壁・輕部・池邊・衣川（・駅家）
芳賀	古家・広妹・遠妹・物部・芳賀・若績・承舍・石田・氏家・文部・財部・川口・真壁・新田
塩屋	山上・片岡・阿曾・散伎・山下（・余戸）

○那須（参考）

郡名	郷名
那須	那須・大箭・熊田・方田・山田・大野・茂武・三和・全倉・大井・石上・黒川



七世紀以降の上野国と下野国との自然的国境は、現在の渡良瀬川になると思われる。地勢としては、群馬県側の茶臼山と金山丘陵と栃木県側の丘陵地に挟まれたやや幅広な地溝状態になっている。その渡良瀬川を挟む形で、右岸の上野国山田郡・邑楽郡、左岸の下野国足利郡・梁田郡はいずれも小規模な郡であり、国郡制の編成過程でこの地点が執拗に分割された可能性を示す。こうした傾向は、近隣では武蔵国と上野国との国境付近でも見られるが、その場合には小規模な郡が集中するのは、主に武蔵国北端部側であるという点で多少傾向が異なる。

上野国・下野国のそれぞれに、他にも小規模な郡は所在するが、山間部の盆地状の立地などが想定され、地域的単位としての渡良瀬川流域のような広がりを示す場合は、基本的に条件が異なる。関東平野北西部に位置する上野国は、赤城山と榛名山との間を南方に流下する利根川とそれに合流する各河川によって沖積平野が形成されている。これに接する形の低平な洪積台地及び扇状地などは、利根川を始めとする各河川を用水として、早い時期に広い範囲で開田化が達成されていた。

一方、同じく関東平野北部に位置する下野国は、渡良瀬川左岸を中心に狭い沖積平野が連続するが、以北の大半が洪積台地である。その北側の日光・那須の山地地域でも、それらを開析する河川に伴う沖積平野も全体的に小規模で、基本的に広域条里が展開するような条件に欠けていた。下毛野地域を代表する鬼怒川は、現在では利根川と合流して太平洋に注いでいるが、かつての利根川と並行し本来東京湾に注いでいた。鬼怒川以西の中小河川は、大半が北から南流して渡良瀬川に合流する。太平洋岸に到達するのは、地域内でも東寄りを流下する那珂川である。那須地域東部を中心とする那珂川流域は、むしろ常陸国との強い関わりを感じさせる。いずれにしても、開発余地が広がったのは地域内でも南寄りの常陸国に接した地域であった。



同様に、「総」地域の分割について整理してみたのが次表である。「総」地域は、房総半島全体を占めていた。佐渡国・淡路国・隠岐国は国単位の島であり、対馬は国単位の島である。国単位で周囲を海で囲まれた立地というのは、伊豆半島の伊豆国・能登半島の能登国などとともに特異なものとなるだろう。北部・西部も内海によって画されていたという理解もあり、むしろ「島」に近いかもしれない。それが三分割されるのは、他の同様の条件の場所と比較して人口密度が高かったことによる。中核を占める上総国・下総国などは、それぞれ国の等級が「大国」であり、前者は平安期には「親王任国」に指定されるほど実入りが良かった。

表 「総」の分割

○安房

郡名	郷名
平群 8	砥河・達良・石井・狹隈・長門・大里・穂多・川上（・余戸）（・駅家）【国府】
安房 8	太田・塩海・麻原・大井・河曲・白浜・神戸・神余
朝夷 5	御原・新田・大瀦・満祿・健田
長狭 8	壬生・日置・田原・酒井・伴部・賀茂・丈部・置津

○上総

郡名	郷名
市原 6	海部・市原・江田・○津・山田・菓麻【国府】
海上 7	佐三・稲庭・大野・山田・倉橋・福良・鳴穴・馬野

郡名	郷名
葛飾	度毛・八島・新居・桑原・栗原・豊島（・余戸）（・駅家）【国府】
千葉	千葉・山家・池田・三枝・糟〇・山梨・物部
印旛	八代・印旛・言美・三宅・長隈・鳥矢・船穂・亘理・村上（・余戸）
匝瑳	野田・長尾・辛川・千俣・山上・幡間・石室・匝瑳・須加・太田・日部・玉作・田部・珠浦・原・栗原・茨城・中村
相馬	大井・相馬・布佐・古溝・意部（・余戸）
猿島	塔陀・八俣・高根・石井・葦津・色益（・余戸）
結城	茂治・高橋・結城・小桶（・余戸）

○下総

夷隅	5	雨霈・蘆道・荒田・長狭・白羽（・余戸）
天羽	4	三宅・讃岐・長津・雨霈
武射	11	巨備・加毛・理倉・押隈・長倉・畔代・片野・大蔵・新居・新屋・横屋
山邊	7	壬生・岡山・菅屋・山口・高丈・草野・武射
長柄	6	刑部・筒見・車持・兼陀・柏原・谷部
埴生	6	埴生・埴石・小田・坂本・横栗・河家
周淮	9	山家・山名・額田・三直・丸田・湯坐・藤部・勝部・勝川
望陀	7	畔治・表可・會戸・飯富・磐田・河曲・鹿津
畔蒜	6	美々・小河・甘木・新田・椅原・三衆

豊田	4	岡田・飯猪・手向・大方
海上	15	大倉・城上・麻績・布方・輕部・神代・編玉・小野・石田・石井・橘川・横根・三前・三宅・鈴木
香取	6	大槻・香取・小川・健田・磯部・訳草
埴生	4	玉作・山方・麻在・酢取

個々の構成郡の規模は必ずしも大きくはないが、上総国の武射郡、下総国匝瑳郡・海上郡は「大郡」ないしそれに準ずる規模であった。特に海上郡は上総国にも存在し、「総」地域の分割の中核をなすものは、実は広域「海上評」の処理にあつたのではないかと考えている。この点に関する詳細に関しては後考に委ねたい。

「毛野」地域と、自然境界としての利根川で画されているのが武蔵国である。常陸国とともに非常に大規模な領域を占めていた。安閑・宣化期の政治的混乱の、地域波及に関する東国の事例として「武蔵国造の反乱」(4)が配当されている。後述するように、「相模—武蔵—上野—下野」という、按察使の監督領域—律令制成立期に限定的な「広域行政圏」のなかで、中心的な位置を占めていた。「総」の場合と同様に、本来は複数の「国造」領域を併合したものであつたろう。但し、国府所在郡である多摩郡以外の規模は小さく、「総」地域よりも念入りの分割・再編成が実施されたことが明らかである。特に「小郡」の多さが際だっており、それらの郡が単独で存立できたのか問題である。国の規模に比べて各郡が小規模なのは、多数のミヤケが設置されたことを反映しているのだろう。

チチブ国造の領域は「毛野」地域に直接接するが、山間地を多く含むこともあり、さらに小規模である。こうした場所で「和銅」産出が演出されたのは、優れて政治的できごとである。改元も含め、周辺地域に土地勘のある多治比三宅麻呂の仕組んだイベントということになる。地域的には、神流川扇状地に展開していた可能性のある「緑野屯倉」

の再編（Ⅱ国境画定）に関する最終段階の作業を象徴している可能性がある。

表 「国造」領域から見た「武蔵」の構成

○「武蔵」国造領域

郡名	郷名
多摩	小川・川口・小楊・小野・新田・小島・海田・石津・狛江・勢多【国府】
都筑	店屋・立野・針折・高幡・幡屋（・余戸）（・駅家）
久良	鮎浦・大井・服田・星川・郡家・諸岡・洲名・良椅
橘樹	高田・橘樹・御宅・県守（・駅家）
荏原	蒲田・田本・満田・荏原・覚志・御田・木田・桜田（・駅家）
豊島	日頭・占方・荒墓・湯島・広岡（・余戸）（・駅家）
足立	堀津・殖田・稲直・郡家・大里・発度（・余戸）
新座	志木・（・余戸）
入間	麻羽・大家・郡家・高階・安刀・山田・広瀬・（・余戸）
高麗	高麗・上総
比企	郡家・渭後・都家・鹹瀬
横見	高生・御坂（・余戸）
埼玉	大田・笠原・草原・埼玉（・余戸）

大里	3	郡家・楊井・市田（・余戸）
男衾	8	榎津・猶倉・郡家・多苗・川原・幡部・大山・中村
幡羅	7	上秦・下秦・廣澤・荏原・幡羅・那珂・霜見（・余戸）
榛澤	4	新居・榛澤・胆形・藤田（・余戸）

○「知々夫」国造領域

郡名	郷名
加美	新田・小島・曾能・中村
児玉	振太・岡太・黄田・太井
那珂	那珂・中澤・水保・弘紀
秩父	巨香・上断・美吉・丹田・中村（・余戸）

同じ武蔵国内でも、「総」地域同等の、複数の「国造」領域の集合体である相模国に近い地点の郡は、やや規模が大きく、内陸部でも「毛野」地域に近い地点の郡は相対的に小規模である。これも地勢の関係があるかもしれないが、「毛野」の分割に関係した措置とみるべきだろう。

近年急速に明らかにされているように、徳川家康が江戸に入府した近世以前の関東平野は、東半部を中心に大きな河川や沼沢が錯綜する低湿地が多数所在するような耕作困難な土地が広がっていた。また、河川から離れた洪積台地の多くも、水利に乏しく開発困難な原野であった。そのような状況にあって、多数の中小河川を合流させて流下する渡良瀬川流域地域は、特に切り立った河岸を伴うわけでもなく、中世以前の開発技術によく適合した地点であった。

「毛野」の本質的な実態とは、実はそのような地勢に関わるものではなかったか。

陸上の交通路が未整備の段階では、内陸部に到達するために河川が主要な交通路であり、幅が広く流れの緩やかな大河川は重視された。ヤマト勢力ないしその先兵たちが、東国各地に入植するに当たって繰り返し利用したのも、河川を利用した船舶による航行であつたろう（5）。

・荒川↓武蔵北部

・利根川↓上毛野西部

・渡良瀬川↓上毛野東部

・那珂川↓下毛野北部

右の各到達地点には、突如大型前方後方墳が築造される。開発余地の点で最大だったのは渡良瀬川流域で、利根川流域がそれに次ぐ。次の段階で畿内型的大型前方後円墳が造営可能であつたのは、「毛野」として一括されている後の上毛野地域であつた。それらの周辺地域には、先行する時期の環濠集落なども絶無ではないが規模も小さく、前提となるような弥生時代の遺跡の動向は、西日本に比較すれば格段に低調であつた。このことには、通例の自然災害の他に三世紀代とされる浅間山の大噴火が関係しているだろう。

### 3、太田天神山古墳出現の意味

太田天神山古墳は、墳丘長二一〇メートルで二重の周堀を伴う前方後円墳である。墳丘規模が東日本最大であるばかりでなく、埋葬施設として畿内の大王墓に特有な長持型石棺を内蔵していたことが知られている。この種の石棺は、東日本では同じ群馬県内の御富士山古墳の例が知られるに過ぎない。石棺の造作は、現地の工人による模倣ではなく



畿内の工人が直接製作に当たったと考えざるを得ない内容を示すという。これらのことは、ヤマト政権の直接的進出を跡づけている可能性が高い。その築造年代は、古墳時代中期の五世紀中葉の年代が想定されている（6）。

太田天神山古墳の立地は、金山丘陵の南東端で太田市の中心市街地の東の平坦地に位置する。基盤に小丘などを取り込んでいる可能性も絶無ではないが、水田面からは多少比高のある微高地上に、ほぼ全面人工的に造営された構造物になるだろう。

その周囲南側には、関東地方でも屈指の広域条里地割が分布している（7）。また北方でも金山丘陵の途絶によって、オープンスペースに解放された渡良瀬川とその支流河川の流路とが、東方に向かって広範囲に展開しているのである。南側への耕地の広がりには、利根川左岸に及ぶものであり、大間々扇状地東端に阻まれるまで、条件が許せば悉皆的に開田化されていたとみられる。

東側への耕地の展開は、渡良瀬川左岸の下野国側が中心であるが、常総台地によって流路の直進が阻まれ、南方に大きく変流するまで連続する。右岸の上野国側にも部分的な条里型土地区画は認められるが、主として利根川によって形成された内陸砂丘などの影響で、現在平坦に見えるほどには開発適地ではなかったらしい。広域的な条里的土地区画の遺存は知られていない。

右の広範囲な平坦地の開発は、渡良瀬川流域の各地点で四世紀後半頃から開始された。その目印となるものが、渡良瀬川流域に点在する前方後方墳である。上毛野側では寺山古墳・矢場薬師塚古墳、下毛野側では藤本観音山古墳などの存在が注意される。その段階の開発は、洪積台地上に揚水する形の「溝渠」によるものであったと見られる。右記の各古墳の周囲には、それほど大規模なものではないが、「溝渠」とそれを利用したとみられる安定的な耕地が付帯する。そしてその「溝渠」の下流の安定的な水田地帯には、後代条里型土地区画が施行されていた。

上毛野地域で先発する太田市寺山古墳については、渡良瀬川右岸の金山丘陵西部に位置する一独立丘の頂部を占める。現地は北に開けた眺望を示すが、眼下に見える水田が現在「古氷条里水田」と呼ばれている方形区画を示す。茶臼山丘陵と金山丘陵の鞍部に位置し、渡良瀬川から分岐した新田堀用水が通過している。この新田堀用水によつてはじめて大間々扇状地東半部の開発が可能になった。恐らくその起源は古代に遡及するものであるだろう。この地点は東山道「駅路」の通過地点でもあり、周辺の遺跡分布の状況などから、律令時代の山田郡の中心地域と見られ、「山田郡家」の所在地と想定されている。

また、下毛野地域でも境界領域に立地する藤本観音山古墳については、渡良瀬川右岸の微高地上に立地する。周囲は渡良瀬川旧流路跡とみられる低地に囲まれている。特に南側の水田は条里型土地区画を示す。注意されるのは、藤本観音山古墳の長軸と一致する走行の水路遺構が近接していることである。その水路遺構は、渡良瀬川旧流路から分岐し、藤本観音山古墳の南を直線的に流下した後、南東方向に変流する。周辺の初期の水田開発には重要な機能を發揮したであろう。

同時代以前の関東平野は、現在の霞ヶ浦が内海状態で、渡良瀬川等を合流させた利根川が東京湾に注ぐ形になっており、標高の低い地域を中心に開発困難な低湿地が広がっていた(7)。そのような場所に比べれば、大河川に隣接した平坦な洪積台地は、当時の技術水準に基づいた開発余地という点で、非常に有望な条件を備えていた。

太田天神山古墳は、先行する形の各開発地点が点在する一円的な地域的実体の中央付近に占地していた。そのことは、これまで周辺地域の統合の象徴として考える傾向があったが、太田天神山古墳の被葬者がヤマト政権に直結する優れて外来的性格の強い人物であることを踏まえると、その墳墓が毛野地域を分断する支配者の画期に関する造営物であったと理解できるのではなからうか。更に言えば、規模を縮小させているもののほぼ類似した性格を持つと想定



できる御富士山古墳は、東西に分割された西三分の二の上毛野地域を、更に二分割したことを象徴する造営物になるのではないか。

現存地名のことで確証はないが、太田天神山古墳・伊勢崎市御富士山古墳の両者に近接して「太田（オホタ）」の地名が残存するのも注目される。地域によって錯綜している部分はあるものの「太田」とは、「御田（ミタ）」に先行し、さらに中央の王権に直結した耕作地であった可能性はある。御富士山古墳の性格がそのように理解できるとすれば、特定の時期の問題になるかもしれないが、「国造」の領域がやや不明瞭な「毛野」地域を細分する新たな要素が付加できるかもしれない。右の二つの地点は、関東地方を中心とする東国地域に打ち込まれた大きな楔に相当する存在であったと考える。

中央に直結したアガタに伴う「オホタ」の設定後、火山災害の影響で地域勢力の存在感が希薄になった上毛野西部地域を中心に、災害復興に関わって「ミタ」を付帯する幾つものミヤケが設定されることになった。多くの避難民の労働力を集約して地域再開発に携わったのは、前代に中央と直結する勢力の後裔になる氏族たちであった。それらの氏族が、後の上毛野氏・下毛野氏と全く一致するものであるかどうかは、より慎重に考察されなければならないだろう。少なくとも地域の偏り・時代による変遷はあったとすべきである。

また、時代の特定が難しいが、渡良瀬川流域を中心とした地域に移植した集団が奉祭した神の内容を示唆する神社の分布が興味深い。渡良瀬川中流域の右岸、茶臼山丘陵の東斜面に『延喜式』式内社の賀茂神社（山田郡）が鎮座する。その周辺には、各種の関連の祭祀遺跡等が所在し、その起源の古さを裏書きする。そして、同じ渡良瀬川右岸を中心に拡散する形で、多くの賀茂神社が列をなして分布するのである。また、賀茂神社の東の地域（邑楽郡）には長柄神社が集中しているが、これも葛城起源の神社である。下流から遡上して来た事実を反映するとすれば、その位置

関係は移植の前後関係を示しているかもしれない。

同様に、葛城地域に起源を有するとみられるのが、倭文（葛木委文坐天羽雷命）神社と火雷（葛木坐火雷）神社である。これらは伊勢崎市御富士山古墳の南方で、現利根川を挟んで南北に位置するが、北の倭文神社を上宮、南の火雷神社を下宮といっている。いずれも「雷」に関わるが、その周辺に多数分布する雷電神社というのも、この「雷」に由来した地域独自の受容形態を反映するものであったのではないか。

また、南東方向に変流する地点の左岸の南向きの丘陵斜面に、賀茂神社と対峙する形で美和神社（山田郡）が鎮座する。上野国以西では甲斐国・信濃国にも分布しているミワ（美和・大神）神社であるが、以東では下野国都賀郡と那須郡に分布している。このことは、国造の支配領域に一对一で対応している可能性がある。賀茂神社との時期差と役割の違いを示している。

また、みどり市大間々町で南東方向に大きく流れを変える渡良瀬川は、茨城県古河市付近まで基本的に等高線と直行する形で流下する。しかし、足利市の西側で等高線を遡上し、北から連なる丘陵を人工的に分断して流下すると見られる地点がある。旧流路と見られる矢場川が著しく蛇行するのとは対照的である。また、茶臼山丘陵と金山丘陵との鞍部を、西に曲がりながら流下する新田堀用水も、比高差を利用して引水する人工的施設である。これらの画期的な人工的水路によって、渡良瀬川流域Ⅱ「毛野」の地に新たに生み出された広大な耕地が、太田天神山古墳成立の大前提になったのではなからうか。

いずれにしても、渡良瀬川流域の平坦地には、五世紀以前に遡及するヤマトからの人の移動を示す要素（神社）があり、何本もの人工的な水路が掘削され、広い耕地が開発された可能性が高い。その結果、有力な古墳が築造されたのである。そして、その人の移動は数世代に亘って繰り返された可能性がある。現在までのところ、渡良瀬川を「毛

野川」と呼んだ徴証はないが、こここそが「毛野」の分割に関する最重要地点であつたと考える。

## 小結

栃木県足利市の東部（旧梁田郡）に「毛野」という地区がある。通称地名であり、行政地名ではないようだが、渡良瀬川を挟んでその南側に、東国では稀少な「県」の地名も残されている。現存地名のことなので、どこまで遡及させて考えられるかは問題だが、その名称は「毛野県」であつたのではなからうか（8）。その地点を中心に一定の領域が上・下に分割されたのが「上毛野・下毛野」あつた可能性がある。

令制の梁田郡は非常に小規模であつたが、「毛野」の分割に係る根本の場所として、それ以上分割されることなく残された可能性がある。下野国分寺出土文字瓦の「矢田」が「梁田」郡でよければ、隣接する太田市矢田堀も含め、渡良瀬川兩岸の物部氏に起因する何らかの関わりがあつたことになる。そうした「毛野」の中心部Ⅱ太田天神山古墳の所在地に隣接する形で、中央の影響力の直接的波及を示す可能性がある要素が残ることは重要であろう。

現在知られる史料の残存状況からすれば、国郡制の成立以前に「毛野」なる地域の実体があつたかどうかは非常に怪しい。しかるに現状では、「毛野」なる言葉のイメージが膨張して、一人歩きをしている状態である。渡良瀬川を自然的境界として対峙する上毛野地域と下毛野地域とは、それぞれ独自の地域的特色を有していることは疑う余地がない。但しそれらは、国的領域の広がりを持つているかと言え、それもまた問題である。個々の一々数郡域程度の領域広がりの中に収斂する可能性が高いからである。

足尾方面から南西方向に流下する渡良瀬川は、基本的にV字谷の底部を流下するので、ほとんど水田可耕地を伴わなかつた。これが、大間々扇状地東端と衝突する形で南東方向に変流すると、大河川に接した低平な洪積台地という

当時の技術水準に合致した地形条件が連続し、関東地方でもかなり早い段階から大規模な開発が着手される事になった。この際、何らかの起点となった可能性のあるのが、上野国山田郡内の渡良瀬川左岸にある三和神社と、同右岸にある賀茂神社である。それらの現在位置は本来の奉祭の場所を示すものではないとの指摘もあるが、全く無関係の場所に立地している訳でもないだろう。

これらのうち美和神社については、背後（北側）に吾妻山を負う。その立地は大和盆地の東辺の大神神社の立地を彷彿とさせ、傾斜の向きなどの地形的な要素も共通する。同様に賀茂神社についても、大和盆地南西部の葛城地域の立地に共通するものがある。つまり、渡良瀬川の低地部分を挟んで対峙している形になるのである。この関係は渡良瀬川の右岸と左岸という形で、東に向かって展開する流域地域全体に共通するものではないか（9）。

さらに言えば、こうしたヤマト地域を起源とするような集団の影響の痕跡は、大間々扇状地を隔てて赤城山南麓地域と観音山丘陵の関係にも投影されている可能性がある。前橋低地帯の大地溝を挟んで対峙する両者について、赤城神社を奉祭するとされる上毛野氏は、大三輪氏との濃厚な関係が推測される。一方、観音山丘陵を背負う形の前橋台地南西部には、奈良盆地西部との共通点が認められる。但しこの場合、葛城氏というよりも一段階新しい敏達系王族関係者や蘇我氏との関係が問題になるだろう。

この周辺の状況が単純ではないと思われるのは、右の定点的な動向に加え、地点によっては渡来系氏族の移植があったことである。さらに東日本全般に線的な分布を示す物部系の要素も認められる。さらに小さな広がりを持つ部姓氏族などが重層的に分布していた。個々の史料相互の前後関係などにも慎重に配慮されなければならないが、少なくとも「毛野」をめぐる古代地域史の実情は、一般化・単純化を拒む性格のものであったと理解するべきである。



注

- (1) 拙稿「上毛野国造」(『東国の古代氏族』岩田書院、二〇〇七年所収)。
- (2) 尾崎喜左雄「毛野の国」(『古代の日本』七関東、角川書店、一九七〇年所収)。また、鐘江宏之「『国』制の成立」(『日本律令制論集』上巻、吉川弘文館、一九九三年所収)。
- (3) 山田英雄「もう一つの道制試論」(『日本古代史攷』岩波書店、一九八七年所収)、丸茂武重『古代の道と国』(六興出版、一九八六年)等参照。
- (4) 甘粕健「武蔵国造の反乱」(竹内理三編『古代に日本』七、角川書店、一九七〇年所収)。
- (5) 鈴木哲雄「中世利根川の下流域」(『中世関東の内海世界』岩田書院、二〇〇五年所収)、村上慈朗「河川流路の変遷から見た古河地域」(古河歴史シンポジウム実行委員会編『古河の歴史を歩く』高志書院、二〇一二年所収)等。
- (6) 右島和夫・徳江秀夫・南雲芳昭「上野」(『全国古墳編年集成』、雄山閣出版、一九九五年)参照。
- (7) 岡田隆夫「条里制」(『栃木県史』通史編原始古代二、一九八〇年所収)。
- (8) 平川南『東北「海道」の古代史』(岩波書店、二〇一二年)によって、「那須国」よりさらに北の陸奥国地域への接続の見通しが提示されている。
- (9) 「県」については、上田正昭「県及び県主の研究」(『日本古代国家成立史の研究』青木書店、一九五九年所収)、原島礼二「県の史的位罫」(『日本古代王権の形成』校倉書房、一九七七年所収)、小林敏男「県・県主制の再検討(一)」(『古代王権と県・県主制の研究』吉川弘文館、一九九四年所収)等参照。
- (10) 周東隆一「加茂・三輪両社の上野の国山田郡鎮座についての考」(『桐生史苑』一三号、一九七四年)、同「鴨

神の軌跡」(『桐生史苑』二四・二六号、一九八五・八七年)、同「山田郡大野郷と上毛野氏について」(『桐生史苑』二七号、一九八八年)等。

## 第二章 「緑野屯倉」の実体

### はじめに

最近、藤岡市滝前F遺跡から出土した「評首」と読める文字資料は、現地が『日本書紀』に見える「緑野屯倉」の想定地域であることによって、極めて重要な意味を持つてくると思われる。

古代の史料には、直接的な地域支配の施設として、しばしばミヤケ（屯倉・御宅・三家…）という語が見られ、これまでも多くの研究者によって、様々な問題関心から考察されてきているのは周知のことである（1）。ミヤケは、史料上だけでも多様な側面を持っており、地域差・時期差の問題もあつて、一言で表現するのは必ずしも適切ではないが、

① 天皇家の直轄領・政治的拠点施設

② 前期型・後期型に区分出来る

③ 倉庫を中心とした管理的施設に、付属する田地を持った領域的広がりを持つ

④ 耕作民として「田部・鑿丁」がいる

といった特徴を拾うことが出来る。

同時代の類似する概念として、オホヤケ（公・大宅・大家・大屋…）がある（2）が、いずれもその中核部分が、相対的に大きな建造物の集合であることが注意される。後代の「郡家」を（コホリノミヤケ）と訓するのも、その機

能・景観面を反映している可能性がある。

ヤケ（家・宅）の冒頭に美称を冠したミ・ヤケやオホ・ヤケが、多分に公的な性格を持つのに対し、タドコロ（田莊）には私的な性格―豪族の所有物の側面がある。但し、これが様々な事情で「朝廷」などに献上されると、即座にミヤケに転ずることになり、景観を含めた基本的な内容は、ミヤケと類似していたと見られる。そして、その構成員として「部曲」がいた。

これらの人的・物的諸要素には、初期莊園の「莊所」などとの類似性が感じられる。史料の比較的豊富な莊園のイメージを、少しずつ古い段階の要素に置き換えて「莊所↓郡家↓屯倉」と遡及させて考えても、各段階の背景になるものを別とすれば、景観的にも類似していて、あながち誤ってはいないのだろう（3）。

人的レベルの「田部・鑿丁・部曲」等は、いずれも機能的な呼称であり、例外的に無姓の渡来人などが充てられることもあったろうが、個人レベルでは既存の伴部や品部や子代・名代などが充てられてくる場合が多かったろう。その点では、支配関係の重層性を感じさせる。

七世紀以前の古代上毛野地域にあっても、周辺諸地域と同様に、そのようなミヤケが幾つか設定されていたとみられる。時間差による偏差も考慮しなければならぬし、何よりも史料の僅少さは避けられないので、明瞭なミヤケの遺構が確認されていない現段階にあつては、多分に想像の域は出ない。しかし、史料の編年の序列に留意しながら、周知の史料の読み直しと、若干の新出の資料等をつきあわせることによって、現時点で想定できる事項を整理してみたい。

## 1、「武蔵国造の反乱」の周辺



上毛野地域のミヤケに関する記事で最も古いのは『日本書紀』安閑天皇二年五月丙午朔甲寅条である。この記事は、極めて具体的に各国のミヤケを列挙しているという特徴がある。

置筑紫穂波屯倉・鎌屯倉、豊国美碕屯倉・桑原屯倉・肝等屯倉・大拔屯倉・我鹿屯倉、火国春日部屯倉、播磨国越部屯倉・牛鹿屯倉、備後国後城屯倉・多禰屯倉・来履屯倉・葉椎屯倉・河音屯倉・婀娜国胆年部屯倉、阿波国春日部屯倉、紀国経湍屯倉・川辺屯倉、丹波国蘇斯岐屯倉、近江国葦浦屯倉、尾張国間敷屯倉・入鹿屯倉、上毛野国緑野屯倉、駿河国椎贄屯倉。(傍線は筆者。以下同じ)

右の記事に見えるミヤケを、便宜的に後の「五畿七道」の配列順に従って分類してみると、概ね次のようになる。

- ①西海道：筑紫(二)、豊国(五)、火国(一)
  - ②山陽道：播磨国(二)、備後国(五)、婀娜国(一)
  - ③南海道：阿波国(一)、紀国(二)
  - ④山陰道：丹波国(一)
  - ⑤東国：近江国(一)、尾張国(二)、上毛野国(一)、駿河国(一)
- ※( )は設置数

この記事で先ず気づくのは、畿内各国の事例は全く含まれておらず、西日本からほぼ東に向かって順に配列されており、数量的にも西日本(豊・吉備)に中心があることである。国名の表記には、全体として古いものを含んでいる。同時代の状況から推して、「一国」という行政区分名は、本来付いていなかったかもしれない。

東国地域については、数が少ないこともあるが、東海道・東山道が未分離のように見え、越地域以北は含まれてい

ない。但し、「尾張国」が東山道的区分（4）でよければ、「⑤東山、⑥東海」のように分離出来る可能性もある。そのように考えられれば、後の「七道」を西から順に見ている形になり、多少なりと後代の知識が加えられていることになる。少なくとも、全体として七世紀後半段階よりは古態を示すとみてよいだろう。その範囲は、同時代のヤマト勢力による支配領域の広がり、ほぼ対応していると見られる。

この記事に限らず、安閑紀にはミヤケ関係の記事が多い。安閑紀自体の分量（項目数）は比較的少ない（安閑元年十四項目・安閑二年七項目）のに、そのかなりの部分（安閑元年五項目・安閑二年三項目）がミヤケ関係の記事なのである。このことは、『日本書紀』の全体的構想の中で、特に安閑紀がミヤケの設定に当たったので、大きな画期になっていたことを示唆している。

#### 「安閑元年」

・四月上総国―伊甚屯倉

・七月河内国―屯倉に皇后の名を付けようとして失敗

・十月大和国―小墾田屯倉・桜井屯倉

和泉国―（茅渟山屯倉）・難波屯倉

・閏十二月河内（摂津）国―三嶋竹村屯倉

・是月安芸国庵城部屯倉

武蔵国横渟屯倉・橘花屯倉・多氷屯倉・倉櫟屯倉

#### 「安閑二年」

・五月全国的な屯倉の設置（後述）

・八月犬養部の設置

・九月屯倉の税の収納

『日本書紀』安閑天皇元年十二月是月条には、「安芸国庵城部屯倉」の設置と並んで次のような周知の記事がある。

：（中略）武蔵国造笠原直使主與同族小杵相争国造、使主・小杵皆名也、經年難決也、小杵性阻有逆、心高無順、密就求援於上毛野君小熊而謀殺使主、使主覺之走出、詣京言状朝廷、臨斷以使主為国造、而誅小杵、国造使主悚憲交懷、不能獻已、謹為国家奉置横渟・橘花・多氷・倉櫟四處屯倉。

贖罪的なミヤケ設置記事が並ぶなかで、この記事をどのように理解するのも問題だが、通説では

・笠原直使主——「国造」——朝廷

×対立（×対立？）

・笠原直小杵————上毛野君小熊：

のような政治的構図が想定され、前掲の安閑天皇二年五月甲寅条との前後関係から、「小杵」の与党である「上毛野君小熊」にも累が及び、結果として「上毛野国緑野屯倉」が設置されたと見るのである（5）。

確かに「緑野屯倉」が設置されたと見られる緑野郡（現在藤岡市周辺）は、上野国域では南西端で武蔵国北部に隣接し、地理的な位置関係からはそれほど大きな矛盾はないようにも思われる。

しかし、安閑天皇二年五月丙午朔甲寅条の、「武蔵国造笠原直使主」への事後処分は、もともと一定の期間（時間幅）を含んだ内容になっており、「上毛野君小熊」にも何らかの処分があったとすれば、本来同一記事に付記されるべきである。また、仮に即時の対処と別に時間差があるような処罰の検討が、中央の政権によって追ってなされた場合であったとしても、「四處屯倉」は反乱者「小杵」の領地分の召し上げと解する方が適当なのではないか。

「四處屯倉」については、横渟（横見郡）・橘花（橘樹郡）・多氷（多摩郡）・倉櫓（久良郡）が想定されているが、これらの想定地が大きく外れていないという前提では、武蔵国南部を中心とした地域のミヤケが献上対象となっていたことになる。

これらのことによつて、笠原直小杵と上毛野君小熊との結び付きは、地理的近接に伴うものではなかった可能性が出てくる。ミヤケとして献上された地域が小杵の本貫地であったか、使主のそれであったかによつて、その後の使主の地域経営にも大きく影響することになったであろう。

近時の埼玉古墳群への再評価（6）なども考慮する必要があるが、上毛野国緑野屯倉の設置は、武蔵国造の反乱との直接的因果関係がなかったか、少なくとも不明とせざるを得ないのではなからうか。

但し、上野国分寺出土の文字瓦には「勾舎人」「」と読める事例がある。これは、安閑天皇二年四月丁丑条に記載された「置勾舎人部・勾鞞部」という記事に直接対応する。「安閑天皇Ⅱ勾大兄広国押武金日天皇」で、「勾金橋宮」に居住していたことに関係していたと見ることが出来るのである（7）。そのような時期に、上毛野地域に関する中央の影響力の直接的波及があったことを裏付ける。上野国分寺に建築資材として瓦を貢納するような範囲に、その後裔氏族が存在した可能性を示す。尤もその出土点数は、他の氏族名と比較した場合に極めて少ない。そこには相対的な優位性の片鱗すら認めることは出来ない。



また、同じ上野国分寺出土文字瓦に「三家」「」とする例もある。上毛野地域の同時代以前の「三家」の表記で著名なのは、七世紀後半（ミヤケ廃止後）の山上碑の「佐野三家」、及び八世紀前半の金井沢碑の「三家子□」である。前者は明らかに施設・組織名称であり、後者は□が「孫」なら氏族名であり、それ以外なら個人名となる（8）。それらに連なる氏族名の可能性はあるだろう。

前橋市中鶴谷遺跡では、「田部」・「大田」の墨書土器や、農耕祭祀に関係する墨画土器なども検出されている（9）。墨書土器の所属時期は平安時代なので、七世紀以前との直接的関係を云々することは出来ないが、周辺の状況を勘案すると全く無関係と退けるのも問題があるように思われる。

この遺跡に近接する前橋市下大屋町上西原遺跡は、勢多郡の郡家関連施設（10）とみられる遺跡であり、その周辺の遺跡では、各種の墨書土器を中心とした出土文字資料が比較的多く検出されている。寺院と正倉院と見られる、溝などで囲繞された二つの区画が存在するらしい。

上西原遺跡の寺院部分は、数次の建替えがなされ、最終的には基壇建物が拡大・整備されて、明らかに寺院になったと見られる区画と、その北に接して倉院的区画が併存するらしい。調査担当者も留意されるところだが、現在の所在地名がオホヤ（ケ）であり、本来の豪族居館を、主たる関係者（造営者・居住者）の死後、寺院に改修した可能性もある。その改修は、正面が変更になるほどの根本的な内容の改変をともなっていた。

一連の遺跡の所在する赤城山南面は、「倭名抄」段階の勢多郡に属し、周知のように上毛野朝臣氏が郡領を務めていた。上西原遺跡の存続期間の長さや遺構の変遷過程が、上毛野氏の動向と何らかの関係を持っていた可能性があるならば、その内包する意味は極めて大きい。

また、長野新幹線関連の箕郷町下芝五反田遺跡では、「犬甘」と読める銅印（図）が出土している（11）。平安

期の私印の例になるだろう。印面のイヌカイについては、名ではなく氏を示すということが前提になるが、ミヤケの守衛に関係する氏族であるという理解もある（12）。渡来系氏族を含んだミヤケの関係者（後裔）が、榛名山二ツ岳噴火後の荒廃した地域（後のクルマ評に相当）の再開発に取り組んだ痕跡と見ることが出来れば興味深い。

同様のイヌカイは、後述のように富岡市貫前神社の北東の高田川に架かった橋名「犬飼橋」にも遺されている。橋自体は、近年の架け替えによって面目を一新したが、付近には「御田頭」なる小字名も存在し、特異な「下がり参道」とされる貫前神社が、本来は高田川と鑓川の合流点という重要地点を扼する、政治的施設（カムラノミヤケ？）の関連施設を継承するものであった可能性を示す。

甘楽郡東部から分立した多胡郡には、構成要素としてオホヤケ（大家）郷があったことになっているが、地域では尾崎喜左雄氏以来これを「郡家所在地」と解するのが一般的なようである（13）。多胡碑の所在位置からみても、その可能性はあるだろう。多胡碑周辺の発掘調査の計画もあるそうなので、今後の成り行きが注目される。

ちなみに、『倭名類聚抄』郷名に見える全国的なオホヤケ郷を整理すると、次表のようになる。

表 『倭名類聚抄』郷名のオホヤケ（大宅・大家・大屋）

国	郡	構成郷	備考
大和	添上	山村・楢中・山邊・楊生・八嶋・大岡・春日・大宅	
河内	河内	英多・新居・櫻井・大宅・豊浦・額田・大戸	
尾張	海部	新屋・中島・津積・志摩・伊福・嶋田・海部・日置・三刀・物忌・三宅・八田	複数のミヤケ所在
尾張	愛智	中村・千竈・日部・大宅・物部・熱田・作良・成海・駅家・神戸	

紀伊	備後	備後	播磨	石見	但馬	越後	能登	越前	下野	上野	常陸	武蔵
名草	深津	安那	揖保	邇摩	養父	古志	鳳至	今立	梁田	多胡	鹿島	入間
大屋・直川・苑部・大田・大宅・忌部・誰戸・断金・駅家・野応・津麻・神戸・国懸・嶋神戸・有真・大屋・荒賀・大野・朝来・日前神戸・伊太・杵曾・神戸・須佐神戸	中海・大野・大宅	大家・高迫・三谿・祓原・大坂・駅家	栗栖・香山・越部・林田・桑原・布勢・上岡・揖保・大市・大田・新田・余戸・浦上・大宅・広山・小宅・石見・中臣・神戸	託農・大國・湯泉・津道・大家・群治	糸井・石和・養父・賀母・輕部・大屋・三方・建家・養耆・長田・淺間・遠佐・駅里	大家・栗家・文原・夜麻	櫛師・大屋・男心・待野・余戸	芹川・大屋・酒井・味真・勝戸・服部・中山・松津・曾博 賀茂・野田・丹生・岡本・出水・從省・可知・朝津・三太	大宅・深川・余戸	山字・織茂・辛科・大家・武美・浮囚・八田	伊嶋・上嶋 白鳥・下鳥・鹿嶋・高家・三宅・宮前・宮田・中村・松浦・中嶋・輕野・徳宿・幡麻・大屋・諸尾・新居	麻波・大家・郡家・高階・安刀・山田・広瀬・余戸
	分立 養老五、安那郡より							弘仁一四、丹生郡より分立		和銅四、分立		

豊前	下毛	山国・大家・麻生・野仲・諫山・穴石・小橋
肥前	松浦	庇羅・大沼・值嘉・生佐・久利・大屋
肥後	宇土	諫染・櫻井・林原・大宅
薩摩	出水	山内・勢度・借家・大家・国形

この整理による限り、オホヤケ郷が郡家の所在地の場合もあるが、必ずそうだと断定出来ないのが実情である。それ以前の、ミヤケから継続される政治的な地点であることが多いのが注意される。武蔵国入間郡に見るように、「大家」と「郡家」とが並立する場合さえあるのである。

常陸国鹿嶋郡・播磨国揖保郡のように「三宅」と「大宅（屋・谷）」または「ミタ」などが併存する例もあるが、これらの郡は規模も大きく、郷の編成母体が①一郡単位のミヤケの幾つかの構成要素であったり、②複数のミヤケを廃止・併合して立評（↓郡）された結果とみられる。こうした大郡については、七世紀後半から八世紀前半を中心に、不都合の調整という形で再度編成が行われて、解消される例も少なくなかったが、少なくとも右の二例はそれを免れている（14）。

同様に、七世紀後半段階の上毛野で最大の「カムラノコホリ」は、同族関係者の広がり的一致する複数のミヤケを廃止・併合して立評されたとみられる。しかし、地域内にあっては、中央との親近性の高い「クルマノコホリ」との相対的な政治的位置によって分割が繰り返され、八世紀には上野地域内第二の令制郡へと転落していったのである。

いずれにしても、現状で確認されているようなこれらの各種資料（出土文字資料・地名等）の問題点は、同時代性に乏しい単独資料の場合が多いことであり、いずれも各地点毎に同時代の脈絡で整理する必要があるだろう。地名・人名・年号などが最低限必要な情報であるが、実際には解説不能な状態のものの方が多いため、かえって様々な憶測



の余地を残すことになっている。

## 2、ミヤケの廃止

七世紀中葉には、蘇我本宗家滅亡事件を契機に大規模な政治改革が断行されたが、一連の改革を運営したのは孝徳天皇・中大兄皇子・中臣鎌足・蘇我石川麻呂等であったとされる。その際にも主流派・反主流派があつて、実際には誰が最終的な権力を掌握していたのかについての評価も一様ではない（15）。

一連の政策の中で、地方支配の目玉と目されるのが「東国等国司」の派遣であつた。同一基準に基づいて、戸籍の整備・耕地の整備・武器の収公等などを行ったとされる。次の段階をにらんで、中央へのつてを得るために「国司」の甘心を買おうとする地方勢力も少なくなかつたろう。

結果として、次いで派遣された「朝集使」によつて業績審査が実施され、すべての「国司」が例外なく違反者となる。令制「国司」に比べると、

### ① 広域行政圏を巡回

### ② 派遣期間が短期間

といった点などが異なる。むしろ後代の按察使（16）・巡察使（17）・觀察使（18）などとの類似性と相違点に注意されるのである。

地域勢力の再編成が積極的に進められ、新たに国郡境界が設定されると共に、活発な「評（コホリ）」の設置が行われた。そこには、天皇家の私有地としてのミヤケの廃止と、全国的な「公地公民」の実施というそれまで未知の世界が広がっていた。

本来コホリとは、コ波尔・コフル：などを語源とする古代朝鮮語で、「村邑」を意味するという（19）。群馬県内各地には、西部地域を中心にフル・フロ地名が多く残されているが、第一義的には①ヤマト南東部（石上・布留）集団の痕跡である可能性は高いだろう（20）。実際その付近には、広域な開発に関連した施設（用・排水路）の痕跡が、遺構として残されている場合が案外多いように思われる。

但し、右のような理解では、②朝鮮系移民の痕跡である可能性についても否定できない。前述の榛名山東南麓（群馬郡）の「犬甘」や新羅系土器の検出と対応するような事例は、これに該当する可能性がある。

現実に七世紀後半を中心に、東国地域への一定割合以上の渡来人の移住が見られたのは史料上でも確認出来る（21）。事務上の問題として、各地の実務担当者が、コホリなる未知の行政区分を実施するに当たって、多くの中央官人の派遣を仰ぐと共に、制度の円滑な実施の前提として、朝鮮半島の地でその制度下に実際に身を置いていた渡来人を配置する必要があったろう。

古代上毛野地域に関しては、渡来人が多数居住していたという根拠不明の漠然としたイメージが巷間流布しているが、同時代の地域の人々にとって、渡来人とされる人々が中央から派遣されたきた倭人集団と、截然と区別されて認識されていたとは考えにくい。特定特殊の政治的集団が、国内を移動を繰り返しながら政策遂行に当たるのは、前述のように史料上でも確認出来るのであって、それらの集団が半永久的に居住していたかどうかは微妙である。

上毛野地域では、飛鳥京・藤原京を中心とする付札木簡の出土によって、各地での評制の施行が裏付けられている。「車（群馬）評」の場合は、知られているのが「桃井里」であって、「五十戸」の段階より若干新しくなっている。同様に「大荒木（邑楽）評」・「佐為（佐位）評」・「碓日（碓氷）評」などの各評の存在が実証された。

上毛野の自余の九評も、当初からすべてあったかどうかはかなり微妙だが、七世紀後半までには徐々に設置された

であろう。「緑野評」の存在も、後述するようにほぼ確実とみられるが、その前提にはミヤケの組織があつたことは疑い得ない。これを、人的・物的にすべて解消するのは困難であつたろうから、極力既存の制度を新規の組織に読み替える努力がなされた可能性がある。

「碓日評」は、『万葉集』の東国防人歌の「碓日坂」の表記に一致し、本来ウスヒ評であることが確定した。また、平成一五（二〇〇三）年には安中市植松地尻遺跡から出土した須恵器蓋裏に「評」と製造段階で刻字された事例が確認され、地域出土の資料によって行政区分の実施が双方向的に確認出来たことは重要である（22）。須恵器の型式から想定される年代では、山上碑（六八五年）を遡る時期の所産である可能性が高い。これに限らず、具体的地名を欠く「評」制史料については、専ら地域内部での流通を前提とする什器への印であると解すべきだろう。

評制下での政治改革の対象は広範囲に及んだが、高塚古墳の造営規制は、その代替物としての仏教信仰を本格化させた。その地域での受容は緩慢なものであつたが、中央の政治勢力を強く意識した一部支配層の利害関係とも一致して、徐々に進行していった。高崎市の山上碑は、ミヤケの関係者と「放光寺」との密接な関係を示す。建立時期は微妙だが、ミヤケの廃止に伴う地域勢力内部の混乱を契機として建立された可能性は高いだろう。

山上碑には、具体的な氏族名が明示されていない。具体的なウジ名表示の未成立もあるだろうし、同時代の地域では自明な有力氏族であつたのだろう。地域内部の婚姻関係の広がりを示すが、碑の所在地とはかなり離れている「放光寺」と密接に関係している点が特に注意される。

七世紀代には、中央政府の意向を挺して、各地で古代寺院の建立が相次ぐが、上毛野地域も例外ではなかった。前橋市山王廃寺（放光寺）は、多胡郡域に立つ山上碑に見えるほか、秋間窯（ウスヒ郡）から瓦の供給を受け、飛鳥寺系または川原寺系軒瓦を創建段階とする。



山王麿寺は、恐らく上毛野地域最古の寺院であり、出土品の内容から見て中央の大寺に匹敵する内容を持っていた可能性はある。造営主体が、上宮王家または蘇我氏とのつながりを持つという理解もある（23）。但しそうであるならば、中央の権力構造の変化が、地方の情勢にも微妙に投影していただろうことは配慮されなければならない。七世紀に上宮王家・蘇我氏は、相次いで権力の座を追われたのである。地方の与党は宙に浮いた状態になったであろう。

伊勢崎市上植木麿寺は、笠懸窯から瓦の供給を受ける。背景に檜前部君（↓上毛野佐位朝臣）氏の存在（24）があるとされている。檜前部君氏については、佐位郡のほか那波郡にも居住が知られ、赤城山東南麓の大間々扇状地西端から南方にかけて勢力を持っていた時期があったとみられる。瓦の供給は郡域をまたぐ可能性があるが、修理の段階は近隣でまかなわれていたかもしれない。

太田市寺井麿寺は、新田郡内の笠懸窯または金山窯から瓦の供給を受ける。同郡の有力豪族は壬生氏などが知られるが現状では詳細不明である。隣接する山田郡の鴨部君？氏や下野国足利郡の君子部氏の存在も視野に入れておく必要がある（25）。当初の東山道「駅路」が、この付近から分岐して西方へと向かう出発点になっていて、各種の施設が集中しているのは特に注意すべきだろう。

東吾妻町金井麿寺は、中之条町の天台窯から瓦の供給を受ける。吾妻郡の最有力の氏族は、石上部君（↓上毛野坂本朝臣）氏の可能性が高く、一部は中央でも地歩を固めた時期があった。同氏は、碓氷郡方面が中心で吾妻郡へも勢力を広げたのか、本来吾妻郡に中心があったのが、交通路を介して碓氷郡まで勢力を広げたのかは判断の材料がない。

これらの寺院に瓦を供給する窯場には、様々な形でミワ（三輪・美和・神…）氏の介在が想定されている（26）。ミワ氏は、ヤマト東南部を本拠地とし、伊勢神宮の創始によって国家祭祀の中枢の地位を簞奪されるまで、信仰面で

全国展開していた。これに何らかの形で窯業技術の伝播も組み込まれて随伴していた可能性がある。氏族伝承における上毛野氏の模倣も注意されるところである（27）。

七世紀段階では、八世紀前半頃と寺院の持つ意味が異なり、各地で施設・設備の建造が奨励されていた。施設（仏）は急速に整備されるものの、「人材（僧）」及び「情報（経典Ⅱ法）」等の不足が懸念された。中央から提供される限られた「人材」と「情報」の共有と争奪とは、中央から距離を隔てるほどに、かなり切実な問題であったろう。各地域内での居住地の隣接は、必ずしも親近関係を示すものではない。公私にわたって、直接結びついている中央の政治勢力の内容もまた、注意すべき問題になるだろう（28）。

評制を解消した大宝律令の国郡制下では、一転して「国司」「国師」の協業による、各地域での宗教統制（29）が始まり、一定の規格を満たさないような寺院が、国家によって認可されなくなって、統廃合が推奨される。新規の施設の造営活動はやや下火になる。『出雲国風土記』の「新造院」の内容が参考になるだろう。但し、一般民衆の仏教そのものに対する理解は格段にすすみ、広範囲に在家の信者が多数発生する。北関東に一つの隆盛の核がある「瓦塔」の建立などは、そのことを如実に裏付けている。

同時期の高崎市金井沢碑（神亀三年）は、群馬郡南部に居住したミヤケの関係者による仏教帰依の姿を端的に示す。具体的な婚姻関係などは不明瞭だが、「三家氏・物部君氏・磯部君氏」など、西毛地域居住と考えられる男女が、在家でも本格的に仏教信仰を行っていた。長命な人物は評制段階から生存していただろう。

私的建碑が禁止されていた当時、敢えて多胡郡域で数次にわたる建碑が行われたのは、地域の政治的矛盾を集約した形になっている。時はあたかも政権中枢で多大な期待の下に送り出された按察使が、十分な成果を挙げられないまま推移し、その打ち切りが取り沙汰されるような時期であった。



初期の按察使の関与した具体的な政策としては

① 按察使所置国以外の「国学」の廃止

② 要件を欠くような寺院の併合令

しか知られていないが、時期的には③行政区分（畿内七道）の画定や、④中央集権的な計画的交通路（陸路）の整備にも関与した可能性はある。金井沢碑に關していえば、郷里制廃止に絡む地域の動揺や、②に示されるような仏教の統制に關係して建立された可能性がある（30）。

### 3、「評首」刻字の意義

最近、藤岡市滝前F遺跡から発見された文字資料は、硯かとされる器種不明の須恵器に刻字されたもので、「（緑野）評首（コホリノオビト）——」と読める（図）。出土遺構は、集落内部の竪穴住居跡で、特に変わった特徴はなかったようである。前述の通り、具体的「評」名を欠くのは地域内部のみでの流通を前提とするからであろう。「評首」については様々な解釈の可能性があるが、第一義的には評制下での官職で、「天武八姓」以前の氏族序列の名残りが示されているとみるべきだろう。これまで評制下のコホリの官人については、「評督（コホリノカミ）——助督（コホリノスケ）——」という二等官が史料上確認されてきており（31）、概ね郡司の四等官に発展してゆくものと理解できる。

身分表示としての「首」については、時期的な変遷もあって一口には言えないが、①伴造氏族や②地方小豪族の姓であり、本義が「大人」という自然発生的な内容であるので、比較的古い段階から存続していた（32）。「天武八姓」（真人——朝臣——宿禰——忌寸——道師——臣——連——稻置）に漏れて制度上消滅したはずだが、実態としては多くの首姓



氏族が存在した。また、聖武天皇の諱を避けて、「史」姓と共に一時消滅（七五七～七七〇）していた時期もある。

「首」姓に関して特に注意されるのは、『日本書紀』清寧天皇二年十一月条に見える「依大嘗供奉之料、遣於明石郡縮見屯倉首忍海部造細目新室、見市辺押磐皇子億計・弘計。畏敬兼抱、思奉為君、奉養甚謹、以私供給。便起柴宮權奉安置、乘馭馳馭。天皇愕然驚嘆、良以愴懷曰、懿哉、悦哉。天垂溥愛、賜以兩兒」という記事である。この記事に対応する内容が『播磨国風土記』等にも掲載されている。「屯倉首」は、文字通りミヤケの管理者と解するべきであらう。

また、『新撰姓氏録』河内国皇別の大戸首氏について「阿閉朝臣同祖。大彥命男比毛由比命之後也。諡安閑御世。河内国日下大戸村造立御宅。為首仕奉行。仍賜大戸首姓。日本紀漏」とあって、少なくとも畿内近国のミヤケの管理者のひとつとしての「首」があつたことが知られる。

「緑野屯倉」の伝統を引く地域にあって、評司としての「評首」は、ミヤケからコホリへの過渡的形態（首↓督↓領）を示す可能性がある。逆にそのような理解で大過なければ、当該文字資料の所属年代は、限りなく評制施行後間もない時期の所産であるとみられるだろう。

これに対して評督系の評司は、具体的に渡来人の移植を伴うような、新置のコホリの評司に任命された場合に用いられたのではないか。地域差という要素と時期差という要素、政治的前提の違いなどが想定できると思うが、現状ではいずれと断定することは出来ない。

∴評造（、評督・助督、）大領・少領（在来系国造系）

∴屯倉首―評首（、評督・助督、）大領・少領（渡来人移植系）

また、昭和六十（一九八五）年に調査された藤岡市上栗須遺跡の1区6号古墳石室前庭部から出土していた古銭（3）が、平成十三（二〇〇三）年に改めて「富本銭」であることが確認された。これまで長野県伊那地方が最北の出土地であったが、それが更新された形である。そうした事実は、今後更新される可能性があるが、これも地域に分与された富本銭の意味理解が難しい。

最近、「緑野屯倉」成立の前提として、尾張国方面とのつながりに注意する理解が示された（34）。時期は前後するが、古墳時代の早い段階での土器の様式の伝播では、伊勢湾沿岸地域から東日本全体への強い影響があるとされ、技術・知識の移植に留まらない、人の移動もあったと考えるのは、荒唐無稽なことではない（35）。但し、コホリ（評・郡）というまとまり全体としてみると若干異論がある。

因みに「倭名抄」段階の緑野郡の構成郷名は、写本による出入りはあるが「林原・小野・升茂・高足・佐味・大前・高山・尾張・保美・土師・俘囚」の十一郷である。

これらのうち「俘囚」は、郷名ではなく注記の可能性がある（36）。『延喜式』の「俘囚稻」の記載（37）などからみれば、本来もっと頻度が高そうであるが、全国的には意外に類例が少ない。そうした意味では、当地で旧広域カムラ評地域を包囲する形の配置がなされていることは、とても象徴的である。本来は、七世紀以前の地域編成に直接関係するような性格のものではなかった。

「升茂・大前・高山・保美」について、現存地名などにも見られるが、郷名としては全国的にも他に類例がない。

どちらかというところ鄙びた地名であると見られる。

「林原」は肥後国宇土郡・「高足」は阿波国名西郡にそれぞれ同名郷が一例ずつある。後者の事例によって、「高足」の読みはタカシであることが判明する。前者の宇土郡は「諫染・櫻井・林原・大宅」という構成になっており、かつてミヤケが所在した可能性がある。

後者の名西郡は「埴土・高足・土師・櫻間」という郷の構成で、「土師」を介して緑野郡との共通性が感じられる。吉野川流域の平野部にあるとはいえ、元来それほど大規模でもなかった名方郡が、平安時代になって東西に分割されたわけだが、「名方」の地名は名東郡にあり、もともとの中心地は下流の郡東部にあったと見られる。

さらに大きなポイントになるのは、残った「小野・佐味・尾張・土師」である。これらのうち「小野」は極めて頻度が高く、次のような各国に分布している。

・【畿内】山城国（乙訓郡・愛宕郡・宇治郡）、

・【東海道】尾張国（丹羽郡）、遠江国（磐田郡）、武蔵国（多摩郡）、下総国（海上郡）、

常陸国（信太郡）

・【東山道】上野国（甘楽郡・緑野郡・群馬郡）、陸奥国（白河郡・安積郡・柴田郡）、

・【北陸道】越中国（砺波郡）、佐渡国（雑太郡）

・【山陰道】丹波国（竹野郡）、石見国（美濃郡）

・【西海道】肥後国（山鹿郡）

特に山城国・上野国・陸奥国への集中が注意されるが、山城国に本拠を持つ政治的集団の、東方への移動順序を示すと思われる。

一方「佐味」は、上野国（緑野郡・那波郡）、越中国（新川郡）、越後国（頸城郡）、備後国（鞆田郡）に分布しており、東日本に重心がある。このことから、一般には佐味朝臣氏の居住に関係しているとみられている（38）。しかし、『新撰姓氏録』には、渡来系氏族である佐味村主氏も掲載されている。必ずしも、従来の「東国六腹朝臣」への今日的解釈によるような、氏族の分布状況に拘泥すべきではないのではないかと考える（39）。

また「尾張」は、河内国（安宿郡）、信濃国（水内郡）、上野国（緑野郡）、備前国（邑久郡）に分布しているが、どちらかといえば分布の中心は東国である。原義が「小治田（壘田）」ということで、耕地の開発技術の所有者としての渡来人と関係している可能性がある。

天武朝段階で、遷都が本格的に検討された科野（信濃）は、それに先立って多数の渡来人が移植されており、備前国邑久郡にも、同様の渡来人の形跡を見ることが出来る。改めて国名や氏族名としての「尾張」の印象（40）を外して考えてみる必要があるだろう。

さらに「土師」は、次のような各地に見られる。

- ・【畿内】山城国（相楽郡）、河内国（志紀郡・丹比郡）、和泉国（大鳥郡）、
- ・【東山道】上野国（緑野郡）、下野国（足利郡）、
- ・【山陰道】丹波国（天田郡）、因幡国（八上・智頭郡）、
- ・【山陽道】備前国（邑久郡）、



・【南海道】阿波国（名西郡）、

・【西海道】筑前国（穂浪郡）、筑後国（山本郡）

全国の窯業生産の大元締めと目される「陶邑」を有する和泉国が大きな中心であり、全体としても西国に比重がある。これらの各地点は、窯業生産に関する中央の技術伝播の順序や広がりに関係しているのではないだろうか。但し、その移動方向はかなり複雑である。

「尾張」はとりあえず措くとしても、「佐味・土師」は共にヤマトに集住させられていた東漢系の渡来氏族（41）に関係しているのではないか。「尾張」の集団の移動の出発点が、河内国安宿郡であれば、西漢系ではあるが渡来人の主要な居住地であった。緑野郡の構成郷名に示されるようなこれらの地名は、全国的にも普遍性・共通性のある渡来人の移植政策の名残りと考ええる。

当地では、とかくカムラ郡が「韓」郡であるとか、多胡郡設置段階以後の「新羅人」の集中のみが強調されているが、むしろ「緑野屯倉―緑野評」の段階での、中央から移住した渡来系氏族の影響の可能性が注意されるのである。古語として考えられるカムラ郡は「神等」郡であり、複数の在来信仰神の存在を示唆している。

八世紀代に居住が確認出来るような渡来人は絶無ではないが、世代的に遡及するミヤケの関係者たちは、窯業生産や繊維生産等に係る殖産的技術をも携えて来ていた可能性もある。端的には、地域最古級の山王廃寺がミヤケの関係者と深く関わっていたのも、律令制以前の中央の政権の地域編成の方針・意向を挺していたことに関係しているのだろう。

## 小結

「緑野屯倉」の設置・廃止から「緑野立評」を経て、令制「緑野郡」の成立に至る地域の関連史料の再整理を試みた。このことは、単に緑野郡地域の歴史の変遷に留まることなく、上毛野地域全体や、東国地域全般の政策的編成作業に関しても投影するものがあるといえるだろう。

近時の緑野屯倉―緑野評想定地域での「評首」という出土文字資料の新出を承けて、一瞥の状態の一つの見通しを示した訳だが、僅か二文字の史料のことでもあり、当然異論も多いことであろう。周辺地域を中心に、全く予想外の史料のさらなる検出も期待される。全国的な普遍性の一方で、優れて地域的な事情も想定されなければならない。

しかし、漠然と語られることの多かった上毛野地域居住の渡来人について、特に集中的に移住したであろうと思われる時期と、その政治的意義について見通しを提示した。その掘るべき施設としてのミヤケに関してもさらに考察が深められなければならない。

本稿は古代史的な問題関心に基づいて整理したため、改めて考古学的なデータに対する精密な分析の必要を感じる。遺跡としてのミヤケの遺構が、各地で確認されてくることにさらに期待したい。これまで発見されている遺構で、見逃されているものがあるかもしれない。逆に、確認出来ないようなことがあるならば、政治的実体としてのミヤケの意義について、改めて考察しなければならないだろう。

## 注

(1) この研究史に関しては枚挙に暇がないが、近年の成果だけでも原島礼二『日本古代王権の形成』（校倉書房、一九七七年）、山尾幸久『日本国家の形成』（岩波書店、一九七七年）、平野邦雄『大化前代政治組織の研究』（吉川



弘文館、一九八五年）などの研究書、門脇禎二「七世紀の人民とミヤケの廃止」（『日本史研究』一三九・一四〇号、一九七四年）、榮原永遠男「白猪・児島屯倉に関する史料学的検討」（『日本史研究』一六〇号、一九七五年）、千田稔「ミヤケの地理的実体」（『史林』五八巻四号、一九七五年）、館野和己「屯倉制の成立」（『日本史研究』一九〇号、一九七八年）、弥永貞三「大化以前の大土地所有」（『日本古代社会経済史研究』、岩波書店、一九八〇年所収）、本位田菊士「ミヤケの起源と本質」（『日本史研究』二二一号、一九八一年）、黒田慶一「長原（城山）遺跡出土「富官家」墨書土器」（『ヒストリア』一一号、一九八六年）などの個別論文が想起される。

（2）吉田孝「ヤケについて」（『日本古代の社会と国家』岩波書店、一九八三年所収）参照。

（3）西岡虎之助「ミヤケより荘園への発展」（『荘園史の研究』上、岩波書店、一九五三年所収）参照。

（4）田中卓「尾張国はもと東山道か」（皇學館大学史料編纂所『史料』二六号、一九八〇年）参照。

（5）甘粕健「武蔵国造の反乱」（『古代の日本』七、角川書店、一九七〇年所収）参照。

（6）高橋一夫『鉄剣銘一一五文字の謎に迫る―埼玉古墳群』（新泉社、二〇〇五年）参照。

（7）群馬県教育委員会『史跡上野国分寺跡発掘調査報告書』一九八八年。

（8）勝浦令子「金井沢碑を読む」（『古代東国の石文』吉川弘文館、一九九九年所収）参照。

（9）前原豊・関口「前橋市中鶴谷遺跡出土の『田部』の墨書のある土器」（『古代文化』四十二巻二号、一九九〇年）。

（10）群馬県教育委員会『上西原遺跡発掘調査報告書』（一九九九年）。

（11）（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団『下芝五反田遺跡』（一九九九年）。

（12）黛弘道「犬養氏及び犬養部に関する研究」（『日本古代国家成立史の研究』吉川弘文館、一九八二年所収）

参照。

- (13) 尾崎喜左雄「多胡碑の研究」(『上野三碑の研究』一九八〇年所収)。
- (14) 拙稿「大宝令制定前後の地域編成政策」(『地方史研究』二〇一号、一九八六年)
- (15) 門脇禎二『「大化改新」史論』下、(思文閣出版、一九九一年)、森公章「中臣鎌足と乙巳の変以降の政権構成」(『日本歴史』六三四号、二〇〇一年所収)等参照。
- (16) 拙稿「初期の按察使について」(『群馬文化』二六八号、二〇〇二年)。
- (17) 林陸朗「巡察使の研究」(『上代政治社会の研究』吉川弘文館、一九六九年所収)参照。
- (18) 大塚徳郎「観察使について」(『日本歴史』一七五号、一九六二年)、笠井純一「観察使に関する一考察」(『続日本紀研究』一九四・一九五号、一九七七・一九七八年)等参照。
- (19) 米沢康「コホリの史的性格」(『藝林』六卷一号、一九五五年)、大林太良「渡来人の家族と親族集団」(『日本の古代』十一「ウジとイエ」、中央公論社、一九八七年所収)等参照。
- (20) 拙稿「地域支配の重層性に関する一考察」(『群馬文化』二七七号、二〇〇四年)。
- (21) 拙稿「日本古代の『移動』と『定住』」(『歴史学研究』五八一号、一九八八年)。
- (22) 安中市教育委員会『植松地尻遺跡』(二〇〇五年)。
- (23) 松田猛「佐野三家と山部郷」(『高崎市史研究』十一号、一九九九年)、同「上野国片岡郡の基礎的研究」(『高崎市史研究』十九号、二〇〇四年)参照。
- (24) 川原秀夫「檜前部君氏と上野」(『群馬文化』二七四号、二〇〇三年)参照。
- (25) 拙稿「古代の『山田』について」(『東国史論』七号、一九九二年)、同「下毛野氏に関する基礎的考察」(西

垣晴次先生退官記念『宗教史・地方史論纂』刀水書房、一九九四年所収。

(26) 佐々木幹雄「三輪と陶邑」(『大神神社史』吉川弘文館、一九七五年所収)、同「続・三輪と陶邑」(『民衆史研究』十四号、一九七六年) 参照。

(27) 拙稿「巨石祭祀の原風景」(『東国史論』二十号、二〇〇五年)。

(28) 拙稿「山上碑・金井沢碑と地域の仏教」(『地方史研究』二九八号、二〇〇二年)。

(29) 柴田博子「国師制度の展開と律令国家」(『ヒストリア』一二五号、一九八九年)、同「諸国購読師制成立の前後」(『奈良古代史論集』第二集、一九九一年) 参照。

(30) 前掲注(16) 拙稿「初期の按察使について」。

(31) 諸系図や那須国造碑等の金石文の、七世紀後半の地域支配に係る内容部分に散見される。

(32) たとえば、太田亮『全訂日本上代社会組織の研究』(邦光書房、一九五五年) 参照。

(33) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『上栗須遺跡・下大塚遺跡・中大塚遺跡』(一九九六年)。

(34) 小池浩平「上毛野と尾張」(群馬県立歴史博物館『研究紀要』二四号、二〇〇三年) 参照。

(35) このことに関する最近の地域での成果としては、かみつけの博物館図録『人がうごく・土器もうごく』(一九九八年) 参照。

(36) 拙稿「『倭名類聚抄』国郡部に関する二・三の憶説」(『古代史研究』十三号、一九九四年)。

(37) 中村光一「俘囚料の設置をめぐる」(『延喜式研究』創刊号、一九八八年) 参照。

(38) たとえば、佐伯有清『新撰姓氏録の研究』考証編二・六、一九八二・八三年。また、拙稿「佐味朝臣氏について」(『東国史論』六、一九九一年)。

(39) 拙稿「池田朝臣氏について」(『群馬文化』二二七号、一九九一年)。

(40) 新井喜久夫「古代の尾張氏について」上・下(『信濃』二一卷一・二号、一九六九年) 参照。

(41) 加藤謙吉「東漢氏の氏族組織の成立」(『大和政権と古代氏族』吉川弘文館、一九九一年所収) 参照。